

531

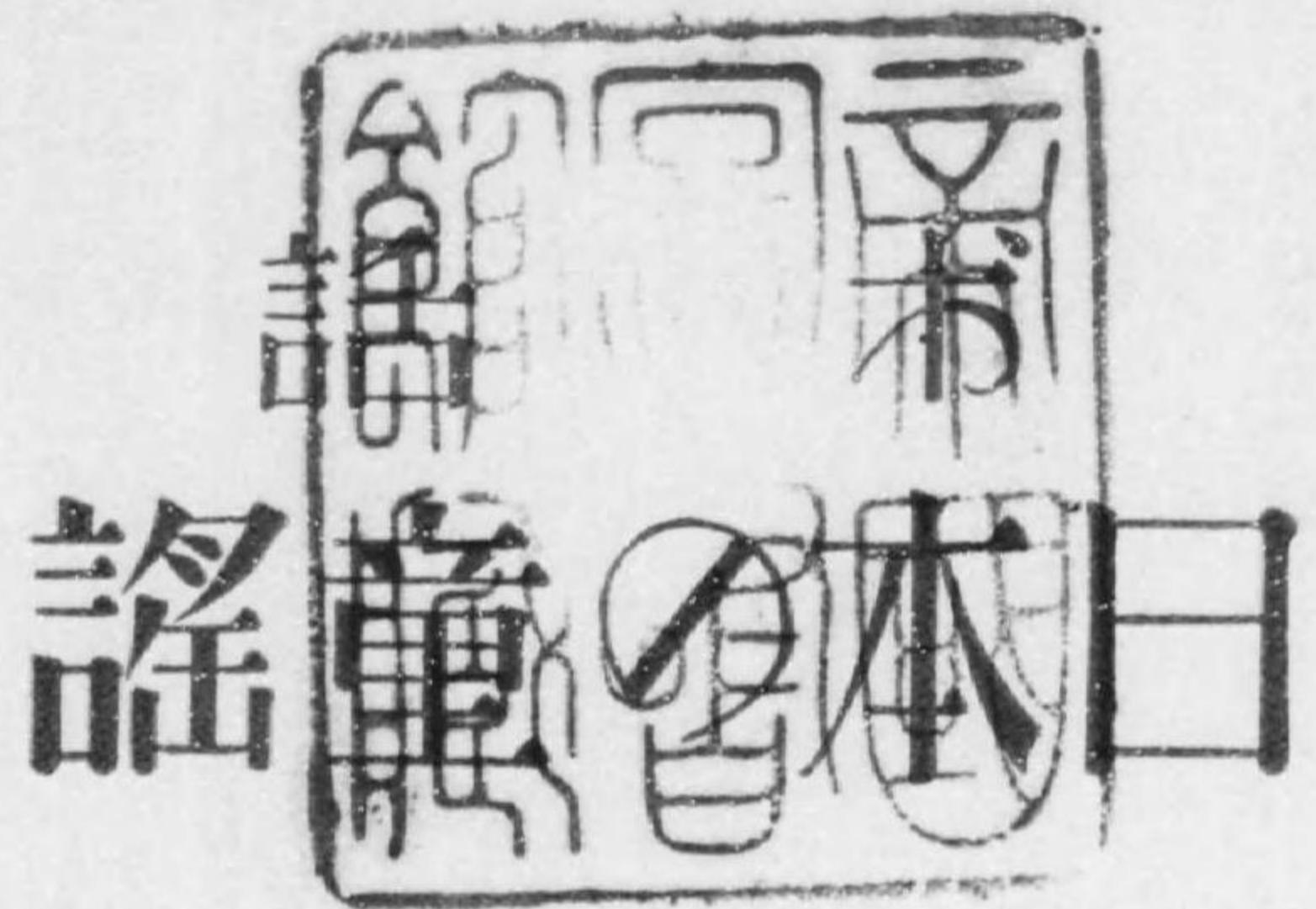
10

6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

始



1856 卅



北原白秋著



ARS  
刊



53/-10

# 目次

蕨とむじな	一
紡車の音	七
ねんねのお守	一四
一、でんでん太鼓	一四
二、香箱鏡	二二
三、蹴られ子守	二三
四、買ひ物	二六
青葡萄	三〇
この子のかはいさ	三五
牡丹	四二
牡丹の庭から	四四

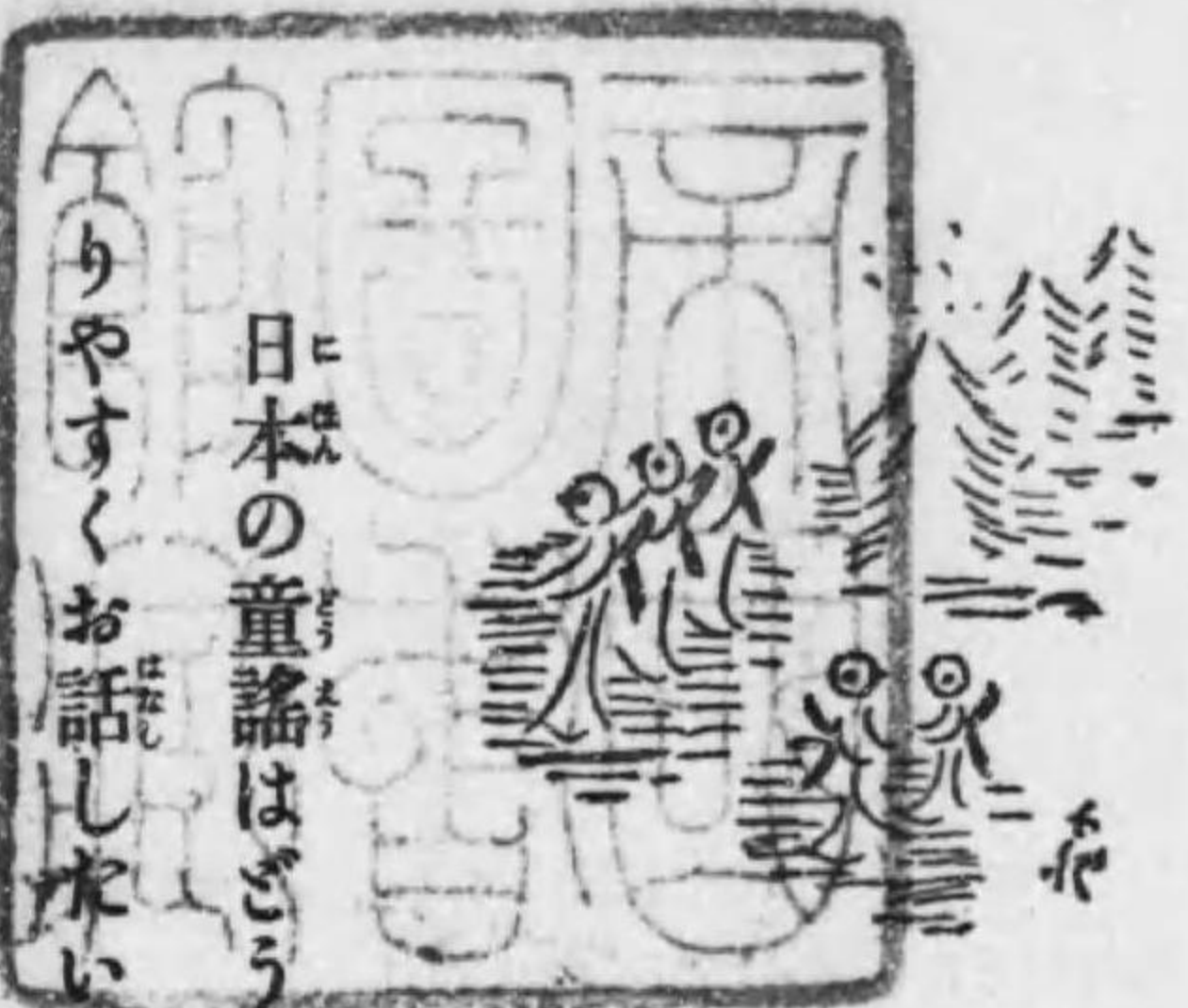
守がつらさに.....	二
與勘兵衛風.....	二
お墓のあやめ.....	二
ねんねん合歡の木.....	二
螢.....	二
尼が紅.....	二
鳩の浮巢.....	二
火消しのからす.....	二
蝸牛.....	101
おころり小山の雉子.....	110
兔のお耳.....	117
赤い山・青い山・白い山.....	120
山の木の實.....	125
笛の中の天童.....	130

胡桃の子ごも.....	133
天神さまとお釋迦 <small>よしみ</small> .....	135
開いた開いた.....	137
かうもり.....	140
酸漿.....	150
蜻蛉.....	153
砂山.....	159
お月さまいくつ.....	166
みやらび.....	171
雁.....	180
鴉鴉何處へ行く.....	188
愛嬌挨拶.....	198
大寒小寒.....	203
雪こんこん.....	210

お正月さん	三三
田鼠打	三八
おたまじやくしと蛙	三二
鳶ころろ	三六
たあんき、ほうんき	二四七
大きい頭	二五五
花の數へ唄	二五九
鳥の數へ唄	二六四
豆の數へ唄	二七三
顔あそび	二七六

装幀	恩地孝四郎
本文カット	恩地孝四郎
柳河	北原白秋
昔ばなし	北原白秋
雀踊り	北原白秋
木兎の家	北原白秋

## 日本の子供たちに



日本の童謡は、どういふものか。それを日本の子供たちに、とりまごめて、わかりやすくお話ししたいと思つて、この『お話し日本の童謡』を編みました。

日本の童謡は、何と云つても日本の童謡です。英吉利のでも、佛蘭西のでも、露西亞のでも、獨逸のでもありません。支那のでもありません。

昔からの日本の山や河や、木や草や、氣候や、お話しや、遊びや、さうした中から日本の童謡は生まれました。代々の日本の子供たちから子供たちへと傳はつて歌

はれて來ました。で、何と云つても日本の子供たちのものです。

二

それから、お母さま方の愛情に満ちたねんねん唄や、姉さまたちの手毬唄や數へ唄も、童謡として歌はれて來ました。ですが、ごもすると大人たちにはみづみづしい子供らしさが失はれて、色色に大人くさく娘くさくなつて、たまには子供たちにきかせたくない卑しいものも流行つたものでした。で、さうしたものはよほど氣をつけないと玉のやうな子供たちの心を傷つけます。然しその中ですぐれたものは、何と云つても日本のものだと思はせませす。

外國の人たちは、日本といふ國を、今でも夢のやうなお伽喃の國だと思つてゐるさうです。櫻が咲いて、不二の山が白くて、お祭には軒ごとに紅い提灯がごもつて、ちよん鬻のお武士や、美しい振袖のお姫様や、松並木の間をゆくお大名のお駕籠や挾箱や、白鳥毛黒鳥毛をうちふる槍持や、飛脚や、繪日傘の子守や、菅笠の娘たちや、さうした徳川時代の日本ばかりが、ほんたうの美しい日本ではありませぬ。

昔むかし、お爺さんは山へ柴刈りに、お婆さんは川へ洗濯に行つた頃から、日本の童話も童謡も生れて來ました。山にはお猿が啼き、椎の實や榎の實がみのり川には眞菰の中に菖蒲が咲き、螢が飛び、むぐつちよが浮び、水田では蛙が鳴き、竹藪や稻むらには雀が群れ、夕焼小焼の空には鴉や燕がわたる。さうしたのがまざりけのない日本の景色です。子供たちは子供たちで、ごんごや鳥追や、雛祭や端午、七夕や栗めしのお節句、亥の子の田鼠打、それから夷講や初午や、お盆や、月見や、鎮守の祭や、祇園會や、さうした季節季節の中に育てられて、「籠めかごめ」や、「廻りまはりの小佛」「狐のごんごん橋」「子をころ子ころ」「お月さまいくつ」「鬼ごつこ」「皿遊び」「かくれんぼう」などの遊びをしたり歌つたりしました。

それに今でこそ何處の田舎でも汽車が通ひ、電灯がつき、自動車が駛つてゐるま



すが、少くとも私たちが子供の時は紙笠のランプの下で、お母さん方のお伽噺をかされました。寝る時には行燈が枕もとに据ゑられ、そのぼんやりとしたつかしい光のかげで、私たちは「あの山越えて」のねんねん唄や、「天智天皇秋の田の」といふあの百人一首の歌やでごろりと寝かされたものでした。ランプの渡つて来ない昔の日本の子供たちの夜夜の遊びを思つて御覽なさい。それはとても今の子供さんたちには考へつきましますまい。

私たちの玩具はまた、みんな山や野の原からもらつて来ました。篠や麥やかんなくづのお笛や、竹こんぼや、酸漿や、車前草や、蚊帳つり草や、笹の葉舟や、みんな自分で探して来ては自分で作つて遊びました。

今は何んでも西洋かぶれがして、誰でも遊びでも玩具でも、昔の日本の子供から傳はつて来た日本の子供のものが、おほかたは忘れられて了ひさうになりました。

日本は日本です。日本の子供は日本の子供です。むろん、日本の子供も世界の子供として新らしい進んだ子供にならねばなりません。然しやはり日本の子供といふことに根ざしを据ゑて、昔むかしの日本の子供たちから傳はつて来た大切なものを忘れてはならないと思ひます。

かういふ考から、私なども新しい日本の童謡を盛りかへしたわけなのですが、それには今までの日本の童謡といふものが何よりの大切な礎になつて居ります。で、皆さんにも是非知つていただかねばならないので、かうした日本の童謡のお話をお目にかけて置きたいのです。

これは皆さんへばかりでなく、日本の子供たちのお父さまやお母さま方へも、お贈りしたい私の仕事のひとつだと思つてほしいのです。

讀める方は御自分で、まだ讀めない小さい方は、お母さまや兄さまや姉さまに讀んでいただいて、晩御飯のあとの一時間でも昔のむかしの子供たちと遊んで下

やう。

また、私の擧げたお話の中の童謡には、今でも皆さんが歌つてゐられるのも澤山にあることと思ひます。さうしたら猶さらおもしろいでせう。同じ童謡でも國で色色とちがつてゐますから、それも見較べて手をうつて下さい。

私はまた、西洋のものや私の作つたものもとりまぜて、較べて見ました。

このお話は大正十年の五月から十二年の七月まで、月に一つづつ、「小學女生」といふ雑誌へ寄稿したものに、この頃また色色と多く書き足したもので、まだこれくらゐ引き續いて書いて見たいと思ひます。で、この本の中のお話が日本童謡のお話のすべてではありません。續篇とそろつて大體のまごまりがつくかと思ひます。またこのお話の中に出した童謡もなるべく面白いかはいいものを選らみました。この外にも同じやうなのが様様に残されてゐることと思つてほしいのです。然しこれだけで、ほんたうのところはおわかりのことと思ひます。

それではこの頁を翻して下さい。

お話は「蕨とむじな」から始まります。

大正十三年十二月

小田原木兎の家にて

白  
秋



## 蕨とむじな

私の事を、みんなが木兎のをぢさんと申します。木兎の家といふ家にあるからですが、私だつて、べつに木兎のやうな顔をしてゐる筈はありません。私の家が屋根も壁も藁葺で、ちやうど木兎のやうなお顔なのです。それからほうほうと木兎が啼きます。遊びにいらして御覽。それはおもしろいから。

今、梅の花が眞盛りです。家の前には紅と白とが咲いてゐます。うしろの竹藪には、もう菫が咲いて、つくしんぼうも出てゐます。赤い瓦の屋根裏からながめると、西の方の箱根の山に、夜は赤い野焼の火が見えます。

山火事焼けるな。ホウホケキヨ。

山のむじなが焼け死ぬぞ。

小田原の子供たちは、その火を見ると、いつもかうしてうたひます。かうした春になると、夕方などは、その箱根の双子の山に、白い綿帽子のやうな雲がいつもかかります。箱根の山の南の方に、聖ヶ嶽といふ山があります。みなさんが頼朝のお話で御存じの石橋山の上に見えてゐます。その聖ヶ嶽を上つて半分ばかりのところ、羊のお小舎があります。そのお山には蕨がよく萌えます。蕨の出る頃になると、あの海老茶いろの翁草の花がいつはいつは咲いて、それはいいところで、その牧場に、羊のむれが、積糞見たいにほつりほつり遊んでゐます。それには二匹の大きな犬がついて番をしてゐます。牧童も寝ころんでゐます。

蕨。わらび。

いついつ萌える。

山焼。野焼。

まだ火があかい。

貉の嫁は、

いついつ来やる。

山焼。野焼。

夜も火があかい。

私はひとりでかうした謠をつくつては、山の下の子供たちの謠に合せてゐま

す。

その聖ヶ嶽に、夜明の虹が立つと、きつと風が出て、海が荒れるのです。昔から朝の虹は雨で、夕方の虹は晴だと申します。そのとほりです。

夕焼。小焼。

あした天気になあれ。

こいふでせう。虹でなくとも、夕焼が綺麗だと、いつも明日はお天気です。

英吉利の童謡にもこんなのがあります。これは私の譯した「マザア・グウス」の中にあります。

朝焼。小焼。

羊かひの気がかり。

夕焼。小焼。

羊かひの後生樂。

おんなじでせう。それからこんなのもあります。

朝のかすみと夕焼空は、

日和よいこの前じらせ。

暮のくもりと朝焼空は、

寝まる羊をみな濡らす。

で、私はいつも屋根裏のお窓や、二階のバルコンから、朝や夕方の虹や、雲の

六  
焼けぐあひを見ては、雨だとか、お天気だとか云つてゐます。お月夜にでも、その箱根の山に白い虹が立つところがあります。ごうかすると、南の方の葡萄いろの海には暗箱の影のやうな、パノラマのやうな蜃氣樓が立つところがあります。

それから、そのお月夜には、下の町から、あの祭のお囃子がきこえて來ます。子供たちの樽天王を揉んでゆく聲もきこえます。

わつしよい、わつしよい。

みなさん。木兎の家にいまして御覽。もつと面白いお話をおきかせしますよ。



## 紡車の音

ねんねん唄の節まはしほご、忘れられない、なつかしいものはありますまい。

ねえん、ねえん、ねんねんよ。

何だかあの唄をきいてゐると、あのぶうんぶうんと廻る紡車の音や、やはらかい綿のほこりにでも包まれてゆくやうな、温かいお母さまの愛情のなかに、いつでも私たちが子供はそろけこんで了ふものでした。さうしてうごりうごりと眠たく

なつて、いつのまにか不思議な星の世界でも歩いてゐるやうな、まだ何か向うの  
向うにいいお空がありさうな、まだ見足りない、それでもどうかすると、お母さ  
まの乳から引き離されてゆきさうな、怖いやうな、うれしいやうな、泣きたいや  
うな、何とも云へぬ夢の心もちに引き入れられて了ふのでした。

坊やは、よい子だ、おねむりよ。

ねんねんころりや、おころりや。

よい子だ、坊やは、おねむりよ。

ねんねんころりや、おころりや。

ねんねんねんねん、ねんねんね。

これは信濃のねんねん唄の一つですが、かういふ風に、ねんねんねんねんとお

母さまが子供たちを蒲團ぐるみに軽く軽くたたいてくださるのです。繰り返し繰  
り返し歌つてくださるものなのです。

その「ねんねんよ。」にも、「ねんねんころころ、ねんころよ。」とか、「ねんね

こねんねこ。ねんねこや。」とか、「ねんねんころりん、ねんころりん。」とか、

「ころりやころりや、ちんころり。」とか、それは色色に違つたのがあります。

三十通りや四十通りはありませう。それにおもしろいのは、田舎になればなるほ

ご亂暴になつて、「ねんねんかんかん。」とか、「ねんねこつころ。」とか、「ねん

ねんよ。こん坊よ。」とか、「ねやれねやれ。」とか、ただ、「ねんねろ。」と云ふ

かと思ふと、少し長くて「ねんねろねんねろ。」になつたりします。「ねんねこほ

ろりこ。とこさんせ。」といふものもあります。昔も上品なお家で乳母たちが御子

さまをすかすのに、「おねんねや。おころおころ。」などと歌つたものださうです

が、下下では「ねろねろ。この子よ。」といふ風に云つたものださうです。

これは日本のねんねん唄ばかりでなく、世界の何處の國のねんねん唄でも、みんなおんなじやうな句の繰り返しになつてゐて、おねむりおねむりといふ風にねぶたい調子にできてゐます。

私の譯した中から例を挙げますと、あの英吉利のではかういふのがあります。

おねんね、おねんね、おねんねや。

泣いてお母さんを泣かすなや。

泣かれりや私も辛ござる。

おねんね、おねんね、おねんねや。

それから、獨逸の搖籠唄の一つにもこんなのがあります。

ねんねや、ねんねや、おねんねや。

ねんねのお父さん羊飼。

お母さんは坊やお守り役。

ねんねのお國のねむりの木

ねんねやねんねとゆすりませう。

ゆすればお夢がふりかかる。

ねんねや、ねんねや、おねんねや。

搖籠を揺りながら歌ふのですから、搖籠の揺れる調子に唄も揺れてゐます。ですから子供のお夢もおなじやうに揺れて來るのです。ゆつくらゆつくらと。

日本のは搖籠でもなく羊飼のお笛の調子でもありますまいが、あの紡車のぶらんぶらんも、ほんごにころりころりとしていいものではありませんか。



それから、お母さん方や乳母たちのは、いかにも愛情に富んでのびのびしたものです。子守のなるところから短かく、調子もさみしく、それでゐて何處かに跳ねるやうなところがあります。それは背中に赤んぼを結へつけて、ゆすりゆすり歩くのでさうなるのだと思ひます。一つ歌ふと、また違つた歌をうたひうたひ、右に左に足を跳ね跳ねするものなのです。「よいよい。」といふ風に。  
やつて見ませうか。

ねんね寝た子に、香箱七つ。

起きて泣く子に、石七つ。よいよい。

ねんねする子にや、赤い衣きせて、

起きて泣く子に、縞の衣。よいよい。

ねんね五郎市。竹馬與市。

竹にもたれて、ねんねしな。よいよい。

ねんねしなされ。夜はまだ夜中。

鶏は若鳥、時や知らぬ。よいよい。

ねんねしなされ。まだ夜は明けぬ。

明けりや、御殿の鐘が鳴る。よいよい。



## ねんねのお守

一四

### 一、でんでん太鼓

ねえん、ねえん、ねんねこよ。

ねんねのお守は何處往たア。

山を越えて、里往て、

里の御土産になにもろたア。

でんでん太鼓に笙のふえ、

起きあがり小法師に振りつづみ。

ねえん、ねえん、ねんころり。

「ねんねのお守は何處往た。」といふこのねんねん唄は、皆さんもよく御存じのことと思ひます。ねんねん唄云へば、「ねんねのお守」の謠さへおぼえてゐる子供たちも多いでせう。まつたく、この謠くらゐ何處の國にも誰にでも歌ひはやされてゐるものはありますまい。それはお母さんのお乳のやうなものですからね。それにまた、あの節まはしこそほんたうのねんねん唄で、あのふつくらこして、濫かで、ころりころりこして、のびやかな、ちやうど遠い浪の音でもきくやうな、あの調子のよさといふものはありません。あれでみんながいつもいつもいい心もちに眠かされるのです。あの節まはしがみんなねんねん唄の元になつてゐ

るのも不思議ではありません。

このでんでん太鼓の「ねんねのお守」は、寶曆明和の頃、お江戸で歌はれたものだらうと云ひます。(いつたいこの謠は「おころり小山」の後についてゐるものなのですが、これだけ引き除けた方がよくわかつてよろしいのです。)それが諸國へ傳はつたり、年代が経つにつれて、色色に歌ひくづされることになりました。たとへば、「何處往たア。」が「何處往つた。」「何處へ往た。」「山を越えて、里往て。」が「お山を越えて里へ往た。」「あの山越えてお里往た。」「里のおみや。」が「お里のみやげ」とい風に。おしまひの「振り鼓」の後も、今の東京では、「叩いてきかすにねんねしな。」とうたひます。

皆さん。でんでん太鼓によく似た蟲がゐませう。それは蝸牛でしたね。

お里の土産に「でんでん太鼓に笙の笛は。」附物ですが、「起きあがり小法師に振鼓。」は、所によつてちがひます。私とその珍らしいお土産の箱を開けて見ませ

う。金襴緞子か、寶物か。兎が出るか、蛇が出るか。舌切雀のお爺さんお婆さんのやうに。

土でつくつたでつころば。でつころば。(伊勢)

路ではかない革雪駄。

これも坊やはくために。はくために。(尾張)

起きあがり小法師に犬張子。

寝ずば鼠にひかれそ。

起きたらお鷹にさらはれべ。(岩代)

起きあがり小法師に犬張子、

吹いてたたいてお目にかけてう。(相模)

それから、「でんでん太鼓と笙の笛。」の外には何にも無くて、

笙の笛はお寺の御門にかけて来た。

お寺の和尚さん、何してゐやる。

何してゐやる。

赤い巾着してゐやる。(尾張)

お萬にくれとて買つて来た。

お萬は死なれて今日七日。

墓のしるしの松の露。(飛騨)

はたいてきかせる。ねんねしな。

吹いてきかせる。ねんねしな。(信濃)

起きたら叩かしよ。笛吹かしよ。

坊やねんねんねんころよ。(豊後)

笙の笛なら音がよかる。

びつびつなかせてお目にかけてう。お目にかけてう。(豊前)

笛や太鼓は何にする。

吹きつ叩きつして遊ぶ。(伊豫)

二〇

さて、その次は佐渡のお土産ですが、その箱には「ごんごんかぐらに鈴もらうた。」(越後)だけ、おしまひの重箱には、鳴物は一つも無くて、「赤い椀にまま一杯。赤い皿に肴一杯。」(加賀)がはいつてゐたので驚きました。

## 二、香箱、鏡

皆さん。里の土産の中に、まだまだ珍しいのがありました。それは嬰兒さんへでなく、かはいいお姉さんへでした。早速取り出してお目にかけてませう。ほれほれ。綺麗でせう。香箱に鏡です。

ねんねん子守は何處へ往た。

あの山越えて里へ往て、

里の土産はなにになにか。

一に香箱、二に鏡、

三に薩摩の板買うて、

二

板屋葺かして、家建てて、  
 家のまはりに杉植ゑて、  
 杉の小枝に鳴く鳥は、  
 雁か、すゐしよか、鶉の鳥か、  
 行つて見たらば御前鳥。(筑後)

1 すゐしよは水鳥でせう。

2 御前鳥はよくわかりません。

### 三、蹴られ子守

お里の土産を持つて歸るばかりでなく、「坊やお守は嫁に往た」のもあります。「お嫁の支度になにもろた。簞笥・長持・挾箱。」といふのですが、まだ小ひさい子守はお山へ鳥追ひにやられたり、波を越えて遠い佐渡が島へやられたりします。さうして、とつとやお馬に蹴られて、泣く泣く歸つたり、宿無しの迷兒になつたりして日を暮らすのです。

### 鳥追ひ

坊が守は何處へ往た。

かんかち山へ鳥追ひに、  
とつとに蹴られて泣いて来た。(加賀)

鯉の子

ねんねのお守は何處へ往た。  
あの山越えて佐渡へ往た。  
佐渡は四十五里、波の道、  
雨風吹いても宿が無い。  
人の軒端で日を暮らす。  
かはいやかはいや蛙の子。  
憎くや憎くや鯉の子。

泣いたら波の中へ入れられやう。  
起きたらお馬に蹴られやう。  
ねんねこ坊つちやん。  
龜の子坊つちやん。  
そらまた、のつぺらほう。(越後)

#### 四、買ひ物

二六

買ひ物に出かけるお守もあります。

#### 帯買ひ

ねんねんかんかん、ねんねんかんかん。

ねんねのお守は何處へ往た。

何處へも往かない。帯買ひに。

帯は七筋、價は八十、

八文高いとお買ひやる。(常陸)

#### 茶買ひ

ねんねんねんや。

ねんねん子守は何處へ往た。

あれは町に茶買ひに。

早く戻ろと思つたら、

雨がふつてすウべつて、

何處を通つて戻らうか。

此處を通つて戻らうか。

ねんねんねんや。(備後)

#### 馬買ひ

二七



ねんねのお乳母は何處へ往た。

お乳母は庄屋に舟買ひに。

舟はをらずに馬買うた。

馬は何處につないでか。

一本松の木の下。

なにこなアにを食はせたか。

去年の黍がら、今年の稗がら、

十把ばかり取り食はせた。(肥前)

### 魚買ひ

ねんねのお守は何處へ往た。

南條長田に魚買ひに。

その魚買うて来て、何にするだ。

ねんねにあげよと買うて来た。(安房)

いちいち姿も言葉も違つてゐておもしろいでせう。

「ねんねのお守」はかうしたお守だけでなく、金掘りにゆくお父さんや、芋掘り花折りに出るお母さんの謠があります、それはまた何かのついでに、いい折を見てお話しませう。



## 青葡萄

三〇

お母さまの愛情ほど、この世の中に、深い正しい清らかな、さうして温で柔らかなものがありませうか。幼い頃に、いつも寝耳に聞き馴れたねんねん唄が、どんな大人になつても忘れられないといふことは、少しも不思議ではありません。

これについて、私は青い葡萄のお話を思ひ出すのです。

これは海の向うのお話です。私はずっと以前に讀んだお話なので、何處の國で起つた事柄か、ごういふ名前の人たちだつたか、よくはおぼえてをりませんが、ただ一つ大事なものはお忘れなさいでます。それだけでいいとさへ思ひます。

たぶん亞弗利加あたりの殖民地のお話だつたと覚えておます。白人の一村がそろしい黒人の群から不意に襲撃されたことがありました。そこで血みごころな戦になりましたが、白人たちはさんざんに攻めなやまされて、ほんご全滅の姿になりました。その日のことです。ある家に一人の女の嬰兒が搖籠に寝かされてをりました。黒人が行つて見ると、嬰兒ははじめて眼がさめたか、にこにここ笑ひかけたものでした。お父さんが殺されたりお母さんが斬られたりした傍で、さもうれしさうに、その仇敵の顔を見上げては笑つてをりました。まるで嬰兒は神様です。流石の黒人も殺すに忍びなくなつて、兩腕に抱へると、そのまま凱歌をあげて引上げて了ひました。

それから十五六年も経つたあとのことです。今度は白人の勢が盛り返して、たうごう、黒人の部落に復讐を加へることになりました。すると向うの黒人の先頭に、それは美しくしい健氣な娘がゐて、それこそ縦横無盡に白人に抵抗しました

が、たうとう生捕になつて、そこらの立木に縛りつけられて了ひました。

みんなが不思議な娘だと差し寄つて見ると、日には焼けてゐるし、蕃人の服装はしてゐますが、髪の色から顔の色、姿かたちまでがどうしても、白人種にちがひはありません。そのなかでも、一目見てハツと吐胸をついたのは、いつか嬰兒をさらはれたお母さんでした。どう見てもどう思つても、その娘は自分の子の幼顔に生寫なのです。

「おお。おまへは私の娘だ。」と、駆け寄つて抱きついたなり、おいおいと泣き出したものでした。

娘も驚いたが、まるで見も知らぬお婆さんなので、ただ首を振つて、「わたしは黒人の子だ。おまいさんのやうな人とは何のゆかりもない。ごいてくれ。」と、睨み返すのでした。

「いいえ。いいえ。おまへは私の子です。」と、お母さんは放しません。「いいえ、

いいえ。私は知らないのだ。」と、その娘が取りあげません。すると何と思つたか。お母さんは、「ねんねんころりや。」と、昔の搖籠の唄を歌つて、歌ひ乍ら、ほろほろと涙をこぼすのでした。ほんこに昔の赤んぼをあやすやうな手つきをして、さうしてまた、泣き泣き歌ふのでした。

娘ははじめ五月蠅さうに横を向いてゐましたが、歌が進むにつれて、幼いあごけない顔つきに還つて来るやうでした。さうして今までの憎憎しげな、反抗に燃えたつてゐた眼のいろが、しだいに穏かになると、しぜんと眼尻が潤んで來ました。大きな、それは清らかな熱い涙がぼろりぼろりと頬の上に流れて來ました。「お母さん、お母さん。その唄はおぼえてゐます。何だかきいたやうなことがあります。お母さんだお母さんだ。ほんこにあなたは私のお母さんでしたか。」

かう云ふと、たまらなくなつて、お母さんに継りついて了ひました。

「青い葡萄の木。あの青い葡萄の木が、お母さん、お家の前にありはしませんで

したか。そんなやうなおぼえがあります。今の唄で思ひ出しました。」と、娘がまた泣き續けました。

「おお。青い葡萄の木。さうです、さうです。それならほんとおまへは私の娘です。あのねんねです。おお。神さま。」

お母さんは、それを聞くともう、踊り上げるばかりに喜びました。

二人はほんこに抱きついて、おいおい泣くばかりでした。

「娘だつたか。」

「お母さんでしたか。」

それを見てゐた白人たちの一隊もたまらなくなつて、ハンケチを鼻と眼にあてて了ひました。

ねんね唄がねんねの記憶を蘇らせたのです。



### この子のかはいら

お母さんの歌つてくださるねんね唄は、乳母や子守のねんね唄とはちがひます。何と云つてもしんみですから、真情があふれてゐます。「この子のかはいさ」といふのがあつてせう。

この子のかはいさかぎりない。

山では木の數・萱の數、

天へのぼつて星の數、

沼津へ降れば千本松、

千本松原・小松原

松葉の數よりまだかはい。

ねんねや、ねんねや、おねんねや。(相模)

何といふ細かな愛に満ちた謠か。數かぎりない木萱のそよぎや、小糠星のまたたきや、松葉や松の花粉や、それはちやうど春の霧雨のふりそぐやうに、その子のお夢にふりかかつて來ます。しんみりとして、お母さんの息づかひまでが動いてゐるやうに思へます。これが乳母の謠になると「七反畑の芥子の數。」とか、「召したる御服の絲の數。」とか云つても、それはどうしても情が浮いてゐます。「和子様いとしにかぎりない。」と歌つても、和様はやつぱりお乳をあげるだけの主人の御子ですから、ほんたうのお母さまはちがひます。

「蟲のお宿」といふのはお母さんの謠ですが、前のよりいくらか小綺麗ではありながら、まだ若いお母さんらしい、しつくりとしないところがあります。

ころりや、ころりや、ちんころり。

ころりと鳴くのは庭の蟲。

蟲のお宿はをみなへし、

尾花・かるかや・萩・桔梗、

七草・千草の數よりも、

數ある蟲の數よりも、

大事なこの子がねんねする。

大事なこの子がねんねする。(讃岐)

それよりも短かいのにいいのがあるやうに思ひます。

この子かはいや。

布引山の、

布引山の、

こぼれ松葉の、

數ほごも。

數ほごも。(伊勢)

布引山といふのが、何かかほゆく、子供ごころに聴いてゐてもいろいろな風  
のそよぎが晝のやうに目に浮んで來さうではありませんか。その布引山からこぼ  
れ松葉が數かぎりもなく降つてくるのです。子供もどんなにお母さんに縋りたく

なるか。考へても、靜かな秋の夜ふけが、母と子の息づかひを一つに澄ましてく  
れます。

なんぼ啼いても、

吾が子の泣くに、

お花畑のきりぎりす。

お花畑には、木芙蓉や、紫苑や、錢菊や、大和撫子や、さまざまな秋の草花が咲き  
亂れてゐるでせう。露がいつはいにこぼれて。その中できりぎりすが啼いてゐま  
す。お寢間ではお母さんと嬰兒がゐます。嬰兒が泣きます。お母さんはきりぎり  
すがかはいさうだとは思つても、その子の方へどうしてもお手がゆきます。か  
ろくたたいてたたいて、お乳をはたげて。尤も、これはまだ、暑い日盛りのやう

にも思へますね。

この子泣くので、日に日に瘦せる。

帯の二重が三重まはる。(伊勢)

お母さんの愛といふものは、その子から何ひとつ立派な報ひを受けようといふのではありません。ただかはいからかはいといふだけなのです。子のためには自分を投げ出してもうれしいと思つて下さるのです。これがほんたうの愛です。

うちのこの子が、いま眠るわいの。

誰もやかましく云うてくれな。(若狭)

かうした、温かで行き届いたお母さんの言葉を思ふと、はじめてしんみのありがたさがわかります。子守などは、ただ騒ぎ立てて歌ひちらしたり、自分勝手に飛びあるいたりしますが、お母さんはいつも落ちついて、少しでも子の眠りを妨げないやうに、針一つでもよく目につけて、周をよく見て、耳を澄まして、ただかろくかろく、蒲團の上から、その嬰兒を叩いてくださるのです。何にも云はないで、心をこめたかうした愛こそ、世の中でいちばん忝いものではありませんまいか。

お母さんのねんね唄では、「ねんねの寝た間に」だの、「お宮まわり」の謠だの、「赤い山・青い山・白い山」の謠だの、それから、皆さんがよく御存じの「おころり小山」の謠だの、まだまだ色々あります。それはまた改めてお話しいたしませう。



## 牡丹

牡丹は支那の人の好きな花です。日本ではふかみぐさとも申します。蕪村といふ人の俳句に「閻王の口や牡丹を吐かむとす。」といふのがあります。ほんごに、あの眞紅な閻魔さまのくわつこあけたお口は、牡丹の花でも吐きさうです。牡丹の花は大きい花で、豊かで、香気が深く、花の中の王さまも云はれてゐます。じつにきれいです。紅いや、白いや、曙いろや、夜の綿雲のやうに紫がかつたのもあります。この牡丹の花が咲くと、ほんごに何もかも世界が明るくなるやうな氣もちがいたします。

向うの細道、牡丹が咲いた。  
咲いたも咲いた。  
見事に咲いた。  
おてんごさまに差し上げた。  
おてんごさまに差し上げた。(三重)

こんな童謡があります。あの大きい花の王さまの牡丹は、おてんごさまに差し上げたが、いちばんふさはしいでせうね。地べたのおてんごさまは、こりもなほさず、あの眞紅な牡丹の花ではありますまいか。





## 牡丹の庭から

### 子守のお話その一

四四

あの牡丹の花よ、子守のお話をいたしませう。

これは片田舎の、貧乏なお家の女の子です。貧乏ですから、少し大きくなると、もう今までのやうに、氣ままに飯ごころをしたり、唄をうたつたり、遊びあるいたりできなくなります。それで、町の方の子守奉公にゆかなくてはなりません。奉公をすれば、自分のお家でねんねえをおぶつたり、お母さんに甘へたりするやうには楽しくないものです。で、誰だつてゆきたくないにちがひありません。ですから、いやいやをやりませう。それでも、どうしても、どうしても、ゆかなければならないので

す。そのうちに、お家の前に紅い牡丹の花が咲きました。うらうらと日は照り明つてゐる。虻や熊ん蜂の翅音はする。ああ、いい匂だ。いい薫がする。うつとりとして了ふ。いつまでも、かうした牡丹の花を見て、お家の庭で遊んでゐたい。でも、向うからはどうしても来い来いといふ手紙が來ます。何で子守奉公などに出るのだらう。かう思ふと悲しくなつてほろほろと泣けて來ます。

前にや牡丹の花が咲く。

子守に來いこの狀が來た。

子守はいいや、かぶりふる。

しやちむり來いこの狀が來た。(周防)

かはいさうでせう。しやちむり來いこはしやりむり來いこいふことです。無理

にも是非是非出でおいでといふのです。たとへ貧乏だといつても、遊び盛りの無邪氣な子供の世界から、かうして見も知らぬ大人の世の中へ、無理やりに引つ張り出されてゆく子供のことを思つてごらんなさい。あんまり酷たらしいではありませんか。

可哀がらしやれ。わしや琴の手ぢや。

親に添ふのはつかの間や。(攝津)

可哀がらしやれ。女の子なら、

生れ故郷をあこに見る。(同上)

かうした貧しい家の女の子だから、少し背丈でも伸びると、すぐにもかうして

子守奉公に出なければなりません。その間でも、父さんや母さんにかはいがつてもほしいでせう。そのかいがつてほしい父さんも、遠いお國に金掘りに行つて了つてゐます。別れ別れになつて了つたのです。

お守が父さん、何處へ往た。

長野長崎、金掘りに、

金は掘らずに、後見れば

後にや時雨の雨がふる。(周防)



# 守がつらさに

## 子守のお話その二

日が照つて、牡丹の咲いてる田舎のお家から、埃つほくてせせこましい町方へ、子守に出たその子のことを思ふと、かはいさうです。

よいよよいよと、よよ節唄うて、

唄うてあるくは守の役。(伊勢)

西の町から、東の町まで、

唄うてあるくは守の役。(同上)

よいよよいよと、主人の子供を背なかに負つて、朝から晩まで、表を行つたり來たりします。

守といふもな浅ましものよ。

道や街道で日を暮らす。(伊勢)

前結びに鉢巻をして、尻切草履で、まるでふくら雀のやうにねんねを膨らかして、むづかる子をすかしすかしして、二人三人と、子守が日向へ集つたり、一人で遠くへ風に吹かれてゆく姿は、そこらの町辻や濠端によく見あたりませう。とりわけて、子守になりたての女の子なら遊び相手もありますまい。何處へ出て

見ても知らぬ子供の顔ばかりです。

五〇

わしがよなまた、阿呆守置いて、  
西も東も知らぬ子に。(伊勢)

自分で自分がなさけなくなるでせう。野育の田舎の子は、こてもあのお辯ちやらの、都の子守にはかなひません。いつも笑はれどほしです。あの牡丹の花の咲いた親里の話でも口に出さうもんなら、それこそかへつてお百姓あつかひに冷やかされたり、眼と眼で笑はれたり、後からこづかれたりすることとせう。

お前見たやうな牡丹の花が

咲いてをります。来る道に。(丹波)

一緒に手をたたいて、よんよやうほいです。褒めてくれたのか、からかふのかわかりません。こもするここちら腹が立ちます。フリフリします。

何がをかしうてお笑ひなさる。

顔に草でも生えこるか。(伊勢)

顔に草でも生えこるならば、

鎌をもつて来て刈つておくれ。(伊勢)

さうなつたら、そんな土百姓の草刈鎌なんぞ町中にあるものかと、ごつと向うでは聲をあげるでせう。

五一

子守さすやうな邪見な親が、  
なぜに乞食にさせなんだ。(伊勢)

よその子にいぢめられる度に、恨めしいとは思ひ乍ら、またその親里へ飛んでも歸りたくもなるものです。

お主に暇とり、あの山越えて、  
都まさりの親里へ。

山が見える。あの山の向うにお里がある。我が家がある。と思ふとたまらなくなる。歸りたい、歸りたい。

あの山高いので我が家が見えぬ。  
我が家戀しや。  
山憎くや。(志摩)

山には煙が立つてゐます。

あれを見やんせ。朝熊の山に、  
銀の煙が、三筋立つのが、  
いつものことや。  
四筋立つのが、氣にかかる。(伊勢)

さうかうするうちに、夏から秋、秋から冬になりかける。日が遠く小さくなつて、霰まじりの時雨さへ、ともするとはらはらと降つて來ます。心ばそくもなるでせう。

お守しまいもんぢや。

これからさきは、

雪がちらつく。

子はいぢる。

そのうちに、見わたすかぎりの山やまがまつしろくなつて來ます。お里のあたりも薄墨いろに雲がかぶさつて了ひます。渡り鳥の西伯利亞鵜の飛ぶのももう絶えはてたでせう。町町の工場の煙突ばかりがもうもうと黒い煙を吐きたてて、裏

手の桑畑などはもうからからに枯れて了つて、こきをり荷車の音だけが北へ北へと消えてゆきます。

守がつらさに出て山見れば、

雪のかからぬ山はない。(伊勢)

## 與勘兵衛風

## 子守のお話その三



ひゆうひゆうと、空つ風が、そこらの松や枯枝にうなるやうになると、霜もいよいよきびしくなります。寒さにふるへながら、赤大根のやうに霜ぶくれのした素足をさらけ出して、その風の吹く頭の上の空を見あげ見あげ、よいよよいよと唄うてあるく子守の役目も、辛いものです。

よいよよいよと、與勘兵衛風は、

風に吹かれて沖なかへ。(伊勢)

與勘兵衛風は、あの跳ね毘を描いた奴風のやうなものでありませうか。それがくるくる廻つたり、泳いだり、たうとうフツリと糸が切れると、遠い遠い沖なかへ吹き流されてゆきます。それを見上げてゆく子守も、考へると、色の黒い鴉風のやうなものでありませうか。吹かれどほして凍えます。落ちつく宛とてありません。その空をまた、寒い鴉が啼いてゆきます。

山の鴉は巾着さげて、

錢のないのかをかをこ。よいよい。(伊勢)

何か買ひたいのは鴉で無うて、さういふ子守自身でせう。紅に千鳥でも繡こりした半襟の一つもほしいでせうか。

子守ひごいもんぢや。沍寒の朝も  
釋投げ置くひまもない。(加賀)

日の出る時から暮れかかるまで、泣く子をゆすりゆすりほつつきあるいて、いぢめられたり、喧嘩を賣られたり、子守もなかなか樂ではありません。

子守や樂なやうでつらいもの。

雨風あらしにや宿がない。

人の軒端に立ちよれば、

人にや憎まれ、

子にや泣かれ、

家に歸れば叱られる。(下 總)

家に歸れば叱られるけれど、お腹も空きます。吹きつ曝らしではふるへます。あかあかと灯のついて、焼魚のにはひでもしてある腰高障子の内が、ついつい覗かれます。

守よ。子守よ。日の暮の守よ。

内をのぞくな。子が泣くぞ。(伊勢)

夕御飯の支度でいそがしい盛りですから、すぐに見つかるごとやされるので、子守はまたしほしほと外へ出てゆかなくてはなりません。思ひ返して、ねんねほろろんとゆすぶりゆすぶり歩いて見ます。それでも日は暮れるし、背中の赤ん坊



は反り繰りかへつてむづかるし、

ねんねほろろん。うしろの藪で、

年寄來いこの鳩が啼く。(紀伊)

小さい子守はもう、自分も泣き出しさうになつて、お里のお母さんのことなどが思ひ出されてなりません。そのうちに、雨もザアザアこふり出します。

雨はふるふる。宮川こまる。

背で子が泣く。日は暮れる。よいよい。(伊勢)

寒や西風。かはいや子ども。

賽の河原で石を積む。よいよい。(伊勢)

唄うて見ても聲がふるへるばかりです。赤ん坊はききわけがありません。火のついたやうに泣き喚いて、手のつけやうもなくなります。もうぢりぢりして來ます。

この子よう泣く。えつほごよなく。

親が泣き泣きでけた子か。(伊勢)

悪口もついて見たくなります。當りちらしてもやりたくなります。

なんぢやいやらし。面ふくらして。

お玉じやくしの荒削り。(伊勢)

お玉じやくしの荒削りとは、いかに何でもひどいせう。主人の子ですからね。子守も悪ずれがしてくると、これくらゐのことは云ひかねません。

起きて泣く子を俎にのせて、

おこきざむよにきざみたい。(土佐)

かう癩癩を起されても困ります。自棄になつた子守は泣くなら泣けといふ氣持で、ズンズンお家の方へ引き返して來ます。もう當てつけになつてゐます。

泣かば泣かんせ。ひやひやひやこ。

家の門まで聞けるよに。(信濃)

案の定、それを聞きつけるに、内からはすぐまた、赤ん坊のお母さんが目に角立てて、叱りつけるのです。「守よ。子守よ。なぜ子を泣かす。」、あれほどいいつけて置いたのに云はれるに、こちらも負けずに悪體をつきたくなります。困りものです。

こんな泣く子の守しよと云うたか。

泣かぬ子の守しよと云うたに。(伊勢)

こんな泣く子の守するならば。

お暇くだされ。私やも去く。(伊勢)

六四

するとお内儀さんが、「お暇やるけど何と云うて歸る。」ときめつけます。「和子が死んだと云うて歸る」。ポイと膨れて飛んで出てしまひます。

守を置くなら跛を置きやれ。

歩きたんびに子をゆする。(伊勢)

我子かはいけりや、守かはいがらんせ。

守を叱れば子にあたる。(加賀)

厭味や脅かしや、かうした聞きづらい唄を歌つて、宵の町の向うへ向うへとゆ

く子守も、小憎らしいとは思へますが、かはいさうでもあります。遠い遠い唄聲がまた、寒いこがらしの中を消え消えにきこえて來ます。

いやぢや、もいやぢや。この子の守は。

日にちまいにち瘦せます。(伊勢)

さうして、たうとうその晩は、それつきり歸つて來ませんでした。

守が守せず。子に怪我さして、

家へ歸れず。軒で寝た。(伊勢)

六五



## お墓のあやめ

### 子守のお話其の四

六六

あの牡丹の花の庭から出て来て、世の中さいふものを初めて知つた子守の辛さは、子供としてはあまり酷たらしいものでした。

この子泣くのでわしや死にまする。

死ねば野山の土となる。(伊勢)

子供ごころにつきつめて見たくもなつたでせう。それかご云つて、誰がかはい

さうだなごご云つてくれませう。泣いても泣いても泣ききれません。

わしが死んでも泣くもなないが、

山の鴉ご親ばかり。(伊勢)

山の鴉は戀しうて泣くか、

團子ほしさに泣くのぢやわ。(伊勢)

かう思ふと、お友だちのやうにいつも眺めてゐた山の鴉が、三角頭のぎよろぎよろ眼に見えて爲方がありません。聲を聞いてさへも胸がつぶれるやうな氣がします。それに闇夜の鴉の啼聲ほごいやなものはありません。

六七

いやだいやだよ。奉公はいやだ。

親と月夜はいつもよい。(下總)

何と云つても親のこゝ、いつしよにお里にゐた時のこゝが思はれます。親ほど  
 ありがたいものはありません。しかし、お父さんは山へ金掘りに、お母さんはも  
 う亡くなつてゐます。歸つたところで、兄さんの家です。兄さんだけならいいけ  
 れど、今は兄さんのお嫁さんが來てゐます。その義姉さんはやつぱり元は他人で  
 した。お義理には優しくしてくれるかも知れませんが、それはしんみの親とはち  
 がひます。何かにつけて意地の悪いこゝが目についたり、出て行けがしにするか  
 も知れません。さうばかりでも無いでせうが、義妹の方でも子守癖がついてもう  
 いぢけて了つてゐます。よくもないこゝを邪推する氣になつてもゐませう。

松の小枝へかかるかこても、

かからないぞへ、兄嫁へ。(伊勢)

たごへ首を縊つて死んでも、歸つてその世話になるのはいやだと思ひます。強  
 情つ張りで、負けすぎらひで、それかこ云つて子守の身の上を思ふと、泣けず  
 はをられません。しくりしくりとお倉の蔭などへ蹲んでゐます。春さきの空はま  
 だ澄みきつて、寒い白い鳥の羽根のやうな卷雲が流れてゐます。何處かでは梅の  
 蕾のにはひがするやうですが、まだ冷めたい霜がくづれませぬ。ちゆびツちゆび  
 ツと啼くのは膨れきれない日向の雀ばかりです。

泣くな。なげくな。五月にやもごす。

赤い手拭買うてやろに。(伊勢)

主人も見かねて、なだめてはくれますけれど、やさしくされることなほ悲しくなるものです。子守はちつと、向うの向うのお里の空ばかり見つめてゐます。

わしが死んだら、

あやめの花を、

立てておくれよ。

墓ごこに。(伊勢)

小さい、ねぢけた子守も、もういぢらしいほど素直になつて、ほろほろとかう唄ひます。自分が死んだら、あの紫のあやめの花をお墓に立てておくれといふ心もち、ほんごに女の子らしいではありませんか。あのあやめの花はまた、小

さなお墓にはよくうつりませうね。私の墓には柳を植ゑてほしいと歌つた西洋の女詩人のことも思はれます。



## ねんねん合歡の木

### 子守のお話其の五

七三

辛い子守のこことばかりお話しましたが、子守だご云つても、さうさう辛い日ばかり送つてゐるものでもありません。今度は朝寝坊のお話にうつりませう。それから、薄紅いろのねんねん合歡の木の花の唄を。

習はうより慣れろといふ諺があります。子守も慣ればそれほど苦にもなりません。こちらが素直でさへあれば、ごんな主人だつてかはいがつてもくれます。大切にもします。いいお友だちもできます。いやなお役だと思ふから手荒くなりますが、主人の子をしんみの自分の弟妹だと思へば、いい遊び相手です、向うもむ

づかりもしなければ、こちらも泣きたくなるやうなこともありますまい。

然しました、慣れ過ぎるこ、野方途に甘へたくもなるものです。主人の家も自分の家とおなじやうに思へてくるうちには、そろそろ怠け癖が出て來ます。夜が明けても人が起きて、なかなかお床を離れられません。つひつひ寝坊してしまひます。

それも眠い盛りの子供のこことだし、季節もほかほかした春のお彼岸の頃になれば、お寺では花祭はある。甘茶は出ます。町でもお花見だの、汐干なごご出あるく人の群が賑やかにもなります。空までが花曇りの桃いろで、紫がかつた綿雲も白い木蓮の向うに浮びます。蝶も飛べば、雀も卵かへしに廂の巢葉にこもります。高臺の時鐘までが、何ごいふこことなしにかへつて眠けを深くします。さうです。ね。そろそろあの紅い牡丹の花も咲き出さうといふ暖かさですから。

ねんねねぶたい。春二月の  
野代蛙が鳴く時分。(無津)

とろりとろりと、ねぶたいとろり。  
今は菜たねの花ざかり。(無津)

さうなつて來ると、張りも我慢ありません。

とろりとろりとねぶたい時は、

馬に五十駄の、

馬に五十駄の

金もいや。(伊勢)

通りからは、ちんからちんからと馬の鈴の音がきこえて來ます。そのお馬に積  
みきれぬほどの金をあげようといふ人があつても、朝のねぶたさには換へられま  
せん。またとろりとろとして了ひます。いい着物も半襟も、もうもうほしくは無い  
とさへ思ひます。罪がありません。

ねんねねぶたい。ねさしておくれ。

朝のお粥のできるまで。(紀伊)

蒲團をひつかぶつては龜の子のやうに圓くもぐつたなりで、いい氣になつて、

子守やよいもの。子にねろねろと、



子ごも寝ないで、子守寝る。(紀伊)

七六

かうなるご、もういけませんね。我儘が過ぎませう。

しかし、その子守たちが、繪日傘でもかついで、日の光の中を、涼しい涼しい南の風に吹かれてゆく姿もかはいいものです。

守子三人傘きてそろて、

蜜柑畑の花のよさ。(攝津)

その子守たちは、白い蜜柑の花だまりを唄ばかり歌つてあるきます。うるさいだのやかましいだの怒號られても平氣で、燕のやうに喋べくつてばかりゐます。

やかましかろけご、しばしの間

守もうたはにや日がたたぬ。(伊勢)

ほんごに唄でもうたつてゐないと、氣もつまるでせうから、少しは大目に見ないといけません。

そのうちに夕方になります。空がほうと濕つて色づいて來ると、薄桃いろの合歡の花もしだいにねむつて、宵の明星がちろりちろりと西の山の薄明にかがやいて來ます。思はぬ雲のあひだなぞにも、こまかな糠星が、いくつもいくつも目について來ます。さうしてあたりがほの暗くなりかかるのもうれいものです。いよいよ勻の中にでも風がそよいであるやうに、穩かにけむつて來ます。

ねんねん合歡の木、

七七

ねやしやんせ。

お鐘が鳴つたら、

起きやんせ。(上野)

かはいいおつとりした謠でせう。ちやうど合歡の匂のやうな。かうした謠をうたひながら、子守たちも、背中の子をゆすりゆすり、また連れ立つて、灯のちらつき出したお家の方へ、野中の小徑をひろつてゆくのです。



螢

「ほうほう螢來い。」

「山伏來い。」

「山吹來い。」

「ぶんぶん來い。」

いろんな風に呼びかけながら、子供たちは、笹や篠竹や團扇やを、振り振りします。夏の夕方には川べりや、露のしとつた草むらや、笹藪のかげなぞに、さう

した子供たちの幾群かが集つて出ます。姉さまたちにお手をひかれたり、母さまのお脊中におぶさつたりしてゐる子もあります。「山伏」だの、「山吹」だの、「ぶんぶん」だの、それから「めんめん」だの、みんな螢の種類なのです。

ほたる来い。

太郎吉来い。

晝はお母さんの乳呑んで、

晩には提灯高上り。(東京)

子供たちは、螢をみんな自分たちと同じやうな子供だと思つてゐます。ですから太郎吉と呼んだり、「ほうたる来い。常念坊。」(伊勢)「ほうたる来い。兼吉ちゃん。」(京都)なぞこも申します。常念坊より、兼吉ちゃんや太郎吉の方が小つちや

くて、螢の子供らしい気がしますね。伊勢では若い衆の兼四郎さんです。

螢は赤ちやんですから、お乳ものむでせうね。お乳ばかりでなく、「晝は草葉の露吸つて。」おます。「晝は菜の葉にこまらんせ。」です。それが夜になると、豆提燈をつけて笹の葉つはへヒカヒカして上つてゆくのです。

「夜には提燈竹登り。」(常陸)「夜はヒカヒカ高提燈。」(陸中)それが幾つも幾つもありますから、それはかはゆくて綺麗です。

ほうたる来い。

山見て来い。

行燈の光をちよいと見て来い。(東京)

螢はまた、行燈の光で飛んで來たり、つけて來たり、持つて來たりします。

螢來。

螢來。

螢の山から火垂りて來うよ。(薩摩)

その螢に何をのませませう。「行燈持つて來い。露くれる。露くれる。」(周防)  
「天の川の露のまそ。」(紀伊)ばかりでなく、「柳の下の水のましよ。」(東京)です。  
それからまだいろいろなのがあります。

螢。螢。一寸お出で。

螢草たくさん御馳走しよ。(丹後)

ほうち來い。

ほうち來い。

落ちたら王子の水のまそ。(大阪)

螢來い。螢來い。

めんめん來い。

柳餅をついてくりよ。

柳餅やいやいや。

よしの中の露がいい。(埼玉)

螢來い。

ぶんぶん來い。

蓑蟲もて來い。

焼いてやろ。(備後)

螢來い。

山吹來い。

鯉のあたまで露くれべ。(山形)

螢草や、玉子の水や、よしの中の露なら、それはすすしいでせうが、蓑蟲や鯉の頭などは、いくら螢でもいやだといふでせうね。それに子供たちは、みんなうまいものを螢に見せびらかしたり、脅かしたりして、自分の方に來させやうとします。やつて來ると、笹の葉つはですぐにうち落すつもりなのです。これはあまり感心しません。「あつちの川深いぞ。こつちの川浅いぞ。」(上總)とか、「お前の

水は泥水ぢや。私の水は砂糖水ぢや。」(伊勢)とか、あつちの水はみんなまづくて苦いのです。

そのなかで、ひとつ代表的なのを擧げておきます。

螢來い來い。

水來い來い。

あつちの水はまづいぞ。

こつちの水はあまいぞ。

黄金の柄杓でくんでくりよ。(相模)

螢はまた、「蓑着て來い。笠着て來い。」(越前)「阿彌陀の光で傘さして來い。」(周防)で、みんな雨の用意をして來ます。雨の螢も綺麗です。

おしまひに、面白い童謡を一つお目にかけてませう。

ほ、ほ、螢よ。

来い来い来い。

お前の夏のくひ物は、

山の奥のどんぐりぼう。

あま皮むいてはがアリがり。

溢皮むいてはがアリがり。(近江)



## 尼が紅

夕焼。小焼。

あした天気になアレ。

あの謡は、ほんごにいい謡です。長い雨があがつて、西の方の空が赤く焼けて来る頃の嬉しさつたらありません。なんといふ美しい雲の色でせう。私なぞの小さい時は空のこゝろを天竺と云つておました。それに天竺といふと、すぐに極樂のお話を思ひ出すのでした。極樂の雲のやうに美しい空を見てゐると、ほんごにそ

の向うの方に、きれいな夢のお國があるやうに思はれてなりませんでした。

その夕焼の謠を二つ三つお目にかけませう。

私の子供の時のお話です。私の生れたところは筑後の柳河といふ町で、河やお堀ばかりの町です。それに不知火の筑紫湯といつて、名高い湯海がつひ傍にありま  
す。その土手に遊びに行くに、白鷺がたくさん遊んでゐます。日が暮れかけると、  
西の方の空が眞紅に焼けて來ます。すると、白鷺の頭が紅く光つて來ます。

白鷺が紅つけた。

白鷺が紅つけた。

私たち子供がみんな手をたたいて面白がるに、白鷺はさまりわるさうに、ひよ  
つこりひよつこり振りかへつたり、飛んで逃げ出したりしました。

はアはア。猿や。乾物干してや。

山の姥に叱られべえな。

陸中では、お猿の乾物にしますけど、私の國では白鷺が紅つけるのです。  
この夕焼を、昔お江戸では、

おまんが紅。いわしぐも。

と云つたものです。おまんといふ女の人になつてゐます。あの夕焼の頃には雲  
もあかく流れます。この紅さしたやうな夕方の霞を尼が紅といふのです。天が  
紅なのです。それを女のことは阿摩といふので、おまんといふ頬紅さした娘さん

に見たてたのでせう。

「京橋。中橋。おまんがべに。」とか、「おん京京橋。なんなん中の橋。おつや十大ふり袖。」とか、江戸の子供は手毬唄に歌つたさうです。京橋中橋は江戸でも非常に賑やかな通なので、娘さんも綺麗にお化粧してゐたものでせう。その中橋にお萬稻荷と云つて、紅をあげて願かけをするお社があつたさうです。このお稻荷さまの名は、「おまんが紅」の童謡から取つたものだらうと云ひます。

お晩が紅さいた。

ここかかに云うてやろ。

石見ではただお晩と申しますが、越後ではおせんといふ子になつてゐます。

あら、誰が紅だ。

こら、誰が紅だ。

向う山のおせんが、

機へる紅だ。

機へる紅だ。

いろいろに違つてゐても、みんなかはいい赤い夕焼の氣持が出てゐて、いい匂がします。





## 鳩の浮巢

九二

皆さん。鳩の浮巢といふのを御存じですか。そのお話をいたしませう。

私の國の柳河では、あの夕焼がまた、川やお堀に紅く映ります。その川やお堀には太鼓型の土橋があつて、元は一文づつ橋賃を取つたものでした。その橋の上から見てゐると、しだれ柳のかげに眞孤や葦が茂つて、そのところどころには紫のあやめや、白い菱の花や、黄色い河骨の花や、薄紫のウオタア・ヒヤシンスなどが咲いたり蕾んだりしてゐます。その流れに、ケツグリといふ小さな水鳥の頭がポツリポツリと浮んだり、潜つたりしてゐます。そのケツグリはたいがい二

羽か四羽か連になつて出てゐるものですが、その豆の様な頭が水の上に出ると、それは綺麗に紅く夕焼に映ります。火でもついた様に。それをみんなで囃し立てるのです。

ケツグリの頭に火んちいた。

すんだと思つたら、ケエ消えた。

「火んちいた。」は火がついた。「すんだ。」はもぐつた。「ケエ消えた。」はかき消えたで、消えてしまつたといふ事です。お分りでせう。

すると、慌てて、ケツグリが水の中に潜つてしまふのです。また出ると、また囃し立てるので、また潜つてしまひます。ほんこに面白かつたものです。

關東ではこの水鳥をむぐつちよと云ふやうです。ケツグリはかいつぐりの國説

で、昔から鳩とか鳩鳥とか云つたものです。

この鳩の巢が浮巢なのです。ちやうど、川端の葦や真菰の根方に巢を編むのですが、その巢が緩るく、それは上手に結へてあるので、水が増せば増したままに上へ浮び、水が減れば減つたままに下へさがります。さうして何時でも水のながれに浮いてゐるのです。その圓い巢の中には、卵が温められたり、孵つたり、かはいい小さな雛が口をあけて啼き立てたりします。

けろけろけろ。

あの尻聲を長く曳いたケツグリの啼き聲ほど、五六月の夕焼の中で、さびしくきこえるものはありません。遠い遠い水の向うならなほさらです。さうしてとつぷりと暮れて了ふと、あちらこちらの人家の燈かげが、ちらちらと水のながれに映ります。すると鳩の浮巢までがほうつと川霧に濕つて、まるで小さなランプでも点したやうにちろめきます。

鳩の浮巢に灯がついた。

灯がついた。

あアれは、螢か、星の尾か、

それとも蝮の眼の光。

蛙もころころ啼いてゐる。

啼いてゐる。

ねんねんころころ、ねんころよ。

巢もほうほう啼き出した。

この私の子守唄は、かうした宵のくちのこを歌つたものです。私の小さい

時、私はよく乳母の背なかに負さつて、螢の出盛る暗い堀端などを見に出たものでした。向うの草むらなごにヒカヒカ光るのが、一つ目小僧のやうに怖くて、何かしら顫へたものでした。まるで螢見たいに光る蟲までが、さうしたところには住んでゐますものね。

九六



## 火消しのからす

日が暮れかけて、西の空が赤く焼け立つ頃になると、よく鴉がかあかあど飛んでゆきます。一羽二羽三羽四羽、五羽六羽と後から後から、慌てきつたやうに飛んでゆく頃は、何かひもじいやうな、せき立てられるやうな、さびしい氣持がするものです。

からす。からす。勘左衛門。

おまへの家はやけるぞ。

早くいつて水かけろ。(東京)

ほんごに 鴉のお家おうちに火ひでもついたやうに飛んでゆきます。からすからすのお家は、日本のごこの國でも焼けるご見えて、みんなさういふ風にうたひます。英吉利では「てんたう蟲」のうたに、ちやうごこれとよく似たものがあります。

てんたう蟲。てんたう蟲。

お前の家や火事だ。

早よ家へかへれ。

そつくりおんなじでせう。子供の考へる事は、西と東はちがつてもやはりおんなじです。少しもかはりはありません。

後のやつ先になれ。

わが家焼ける。焼ける。焼ける。(伊勢)

からす。からす。勘左衛門。

わがうち焼ける。

ちやつといつて水かきよ。(三河)

からす。からす。紺がらす。

お前の家は皆焼ける。

早く行んで水かけ。(下關)

みんな火事です。夕焼です。早う行つて水かけろの次に、

杓がなければかしてやる。(近江)

水がなけりや貸そぞ。

餘つたら返せ。(田雲)

さか、みんなして、下からワイワイさわいでおどかすのが面白くて、子供はいろんな事を云つてからかひます。火事場に彌次馬はいつもつきものですね。

鴉のうたでは麴買ひにゆくのが、髪結うた鴉や、親の錢を盗んだのや、田螺をいぢめるのや、いろんなのがあります。それはまたいつかお話しませう。さにか、童謡では鴉はなかなかの愛嬌ものです。



# 蝸牛

今度は蝸牛のお話。

蝸牛は、童謡では螢や鴉見たいに、いや、それよりもズツと持て囃されてゐます。これくらゐ子供らしくて、どこか田舎者らしい、をかしみのあるものは珍しいでせう。いつも子供たちからいぢめられごほしです。この蝸牛は「かたつむり」「まゐまゐつぶろ」「めんめんこうこ」「でんで」「だいらう」、その外、いろんな名前があります。芭蕉といふ人の句に、

蝸牛角ふりわけよ須磨明石

1011

こいふのがあります。あの二つのお角の先に玉がついてゐるでせう。あれでい  
ろんな葉つはや木の枝にさはつて、要小心しいしい歩いて行くのです。何か影でも  
さすこ、驚いてスツと引つ込ませる。またそろそろと出して振り振りします。あ  
れが子供たちには珍らしいのですね。

めんめんこうこ。

角出せ。

小糠一升くれる。(三河)

でんでんでんの蟲。

箕も笠も買うてやる。(因幡)

かたつむり。かたつむり。角出せ。

河原の婆が豆を炒つて食はす。(土佐)

何か御馳走を食べさしちや角を出させようこします。「太鼓のぶちこ代へてや  
ろ。」(四日市)とも申します。これはよく英吉利や亞米利加の子供たちと似てゐ  
ます。

蝸牛。蝸牛。角出せや。

麵麩とお麥を、それあげよ。(マザア・グウス)

1011

向うでもかう申します。それでも出さないと 今度はいろんなことを言つてお  
ごかすのです。

まゐまゐつぶろ。

湯屋で喧嘩があるから、

角出せ。

槍出せ。(東京)

おばおば(蝸牛のことです)。おばらア家が焼けるから、

棒持つて出て来い。

槍持つて出て来い。(上 總)

でえくら。でくら。

角出して踊らんこ。

向への岸岩坊が蛇を追つて来つご。(薩 摩)

まゐまゐつぶろ。

小田山焼けるから、角出して見せろ。(常 陸)

かたたん。かたたん。角出しやれ。

爺も婆も焼けるぞ。

早う出て水かけろ。(伊 豫)

このおしまひのはいつかお話したマザア・グウスの、てんたう蟲のうたによく似

てるでせう。「てんたう蟲。てんたう蟲。お前の家が火事だ。」といふ、あれで  
す。まだ角出さないよ、

ねえぼろつぼろ。

角出して見せぬよ、臍撲つこ。(上野)

だいらうによ。だいらうによ。

角出せ。角出せ。

角出さねば、お寺の鎌を持つて、

ちよさちよさしましよ。(越後)

それでも出さないよ、

かたつむり角出せ。

汝出すこ、

おれも出す。(羽前)

と言ひます。をかしくなりますね。ほんごに子供の頭からも角が出さうです  
ね。さうなるご自分も蝸牛になつたつもりだから、笑はせますね。

マザア・グウスの中で、私の譯した蝸牛のうたに面白いのがあります。二つ三つ  
お目にかけてませう。

蝸牛。でむし

蝸牛。でむし。



盗人が来るぞ。汝の壁を

ぶつこはしに来るぞ。

蝸牛。でむし。

その角出せよ。

盗人が来るぞ。穀物奪りに。

盗人が来るぞ。夜明の四時に。

蝸牛角出せ

蝸牛。蝸牛。角出せや。

お父さんもお母さんも死んでしまふた。

お前の御兄弟姉妹は裏ん口の庭で、

パンをおくれえと乞うてゐる。

二十四人の仕立屋

二十四人の仕立屋が、

蝸牛殺しに、えつさつさ。

めつたに尻尾にや觸れまいぞ。

そりやこそ蝸牛が角出した。

小さなカイロ牛をつくりだ。

逃げ逃げ、逃げなきや殺される。

おもしろいでせう。この次ぎは何のお話にいたしませうかね。



## おころり小山の雉子

110

「おころり小山」は、ほんたうは雉子の子のお謠です。東京では、「ねんねのお守」の前にうたひます。かういふのです。

ねんねん、ころころ、ころころよう。

おころり小山の雉子の子は、

泣くとお鷹にさられます。

だまつてねんねんねんねんよ。

これを信濃では、

眠入れ。うつつけ。雉子の子よ。

鳴くとお鷹にさられるぞ。

お鷹にさられたその時に、

けんけんばたばたせぬがよい。

と歌ひます。「うつつけ。」は、「うつぶせ。」で、おこなくお顔を伏せておねむりといふ事です。それから、「けんけんばたばたせぬがよい。」も、おもしろいでせう。鳴いてわめいたり騒いだりせぬがよいといふ事を、そのまま、聲や、かたちであらはしたのです。

その信濃では、「おころり小山」が、「ねんねん小山」になつてゐます。

一一二

ねんねんよ、ころころよ。

ねんねん小山の雉子の子は、

何になるこてほろろうつ。

犬になるこてほろろうつ。

犬にはなるまい。簀になる。

簀にはなるまい。笠になる。

笠は何處笠。越後笠。

越後の祭に出したれば、

一貫五百と値がついた。

一貫五百で賣らうより、

置いて子守女にささせませう。

おもしろいでせう。雉子の子が啼くことを、その聲の調子をとつて、「ほろろうつ。」と云つたのです。ほんたうを云へば、雉子の啼聲はけんけんで、山鳥のがほろろ。又はほろほろなのです。行基菩薩のお歌にこんなのがあります。

ほろほろと、啼く山鳥の、聲きけば、

父かこそ思ふ。母かこそ思ふ。

それから、俳諧の聖と云はれた芭蕉翁の句に、

父母のしきりに戀し雉子の聲

一一三

ごいふのがあります。これは紀州の高野山にのぼられた時に詠まれたのです。昔から雉子ほご子を思ふものはないと云はれて、「焼野の雉子。夜の鶴」などご諺にも傳へられてゐますが、「わんわん」唄にも、それを取つたのがあります。

山が焼けるが、

起たぬか、雉子よ。

なんで起ちませう。子を置いて。(兵庫)

頬の紅いかはいい子の雉子を守るためには、山焼野焼の煙のなかにも巻きこまれて、けんけんご啼き立てる尾の長い雉子のお母さんのこころを思つて御覽なさい。それにまた、黒く焼けた真菰の根などに、青い芽生がポツポツと萌え出す頃にな

ると、よく河端なごを求食つて、遠いうしろを振り返つてゐるあの親雉子の春さきの姿もいいものです。

ごごさんえ。かかさんえ。

山で雉子が啼くわいな。

なんご云うて啼くかいな。

けえんけえん。ばつたばた。(丹波)

この山の子供の雉子の謠も、ごごさんえ、かかさんえと云つてゐます。雉子の聲をきいてゐると、お父さんやお母さんのこころが思ひ出されるご云ふのも、あゝした雉子の情愛を、平常に見たり聴いたりしてゐるからのことませう。おなじ雉子を歌つたのでも、至極無邪気なものもあります。

鐵砲かついで、

脇差さして、

雉子のお山へ、

雉子うちに行つたれば、

雉子はきんきん飛び出すところ。(常陸)

雉子と云へば、私の國には「雉子うま」といふ玩具があります。これは清水山の觀音さまで賣つてゐます。

挽きつはなしの松の枝で荒く彫つて、赤と緑で色をつけてあります。車の輪も皮のついたまま輪切りにしたものです。中には小さい子の雉子が親の雉子に乗つかつたものもあります。

### 兎のお耳



「ねんねん小山」のは兎です。

ねんねんよ、ころころよ。

ねんねん小山の兎は、

なアぜにお耳が長ござる。

おつかさんのお胎にゐたとき、

権の實權の實たべたゆゑ、

そオれでお耳が長ござる。

ねんねんよ、ころころよ。

ねんねん山の兎は、

なアぜにお耳が長ござる。

おつかさんのお胎にゐたときに、

批把の實ささの實たべたゆゑ、

そオれでお耳が長ござる。

東京ではまた、「お耳がお長いよ。」とも申します。但馬のは亂暴で、ちよつとをかしくなります。歌つて見ませう。

ねんねん山の兎は、

なぜにお耳が長いや長いや。

うまれた時に父親が、

耳を銜へて振つたげな。



## 赤い山・青い山・白い山

ねんねの寝た間に、

何しよいの。

小豆餅の、

椀もちや。

赤い山へ持つてゆけば、赤い鳥がつつく。

青い山へ持つてゆけば、青い鳥がつつく。

白い山へ持つてゆけば、白い鳥がつつく。

この、赤い山・青い山・白い山のねんね唄ほごすぐれたお山の童謡は日本にもありません。晝のやうで、夢の中の極楽島のやうで、色色の霞が勻つて、それがかはいらしくて、ぼうつとしてゐます。ねんねの寝た間のここですからなほさらです。あの椀餅を、一羽づつ出て来てつつく赤い鳥・青い鳥・白い鳥は、とりもなほさず、すやすやと眠入つてゐる嬰兒たちのたましひに翅が生えて飛んで行つたのちがひありません。その小鳥たちに、小豆や椀の實を砕いて、それをお餅に搗き交ぜて、そのまだほかほかして湯氣が立つてゐるのを、持つて行つてくださる町のお母さんたちも、きつと赤い着物や青い着物や白い着物を着ておいでなすつたせう。赤い着物のお母さんは赤い小鳥の自分の嬰兒を、青い着物のお母さんは青い鳥の嬰兒を、白い着物のお母さんは白い小鳥の嬰兒を、それぞれお探しになつて、さうしてお夢の中でやさしくやさしく頭を撫でたり、掌の上に乗せた

り、小六月の日の暮れるまでも、いつしよに遊んでくださるでせう。

私も「赤い鳥小鳥」の童謡をいつか作りましたが、あれはこの謡が本になつてをります。

赤い鳥。小鳥。

なぜなぜ赤い。

赤い實をたべた。

白い鳥。小鳥。

なぜなぜ白い。

白い實をたべた。

青い鳥。小鳥。

なぜなぜ青い。

青い實をたべた。

私の童謡はまた、おなじやうで、これとはちがつた深い意味を持たせてあります。さう大人のやうに考へないでも、赤い實をたべたから赤い鳥になつたのだと思つて下さればいいのです。白い鳥でも青い鳥でも、白い實や青い實を食べてさうなつたのでせうし、おなじやうに、

黒い鳥。小鳥。

なぜなぜ黒い。

黒い實をたべた。



黄ろい鳥。小鳥。

なぜなぜ黄ろい。

黄ろい實をたべた。

でもかまひません。おなじ色ならなんだつていいのです。茶いろだつて、紫だつて。



## 山の木の實

赤い實・白い實・青い實のお話が出ましたから、續いて、山の木の實のねんねん唄をお目にかかせう。

日本の子供はよく、椎やごんぐりや榎の實を拾ひに出ます。冬になると、山家のお婆さんは茶色の頭巾に茶編の袖無しを着て、爐ばたで、炮碌をかけて、こんがりこんがりこ焼いてくれませう。夜は時雨が降つて來ます。お猿が啼きます。かうした物淋しい、さうして香ばしいお伽噺の中の暮らしは、どうしても日本のものです。それから、ばちばちと柴の燃えるにはひもいいものですね。

さあ皆さん。爐ばたにお寄りなさい。古い昔の童謡からお話しませう。

一二六

ねんねこ、ねんねこ、ねんねこや。

彼方向いてもやアま山。

此方向いてもやアま山。

やアまの中に何ががある。

椎や、鈍栗、かアやの實。(出雲)

何處を見ても山ばかりです。山には風が吹いて木の葉の音がします。びいびいと啼く長尾鳥の聲や、柴を伐つてゐるお爺さんの斧の音もします。よく聴いておれば、溪底から水の響もして來ます。秋の黄色い日の光に高く高く流れてゆく雲も、輝くかと思ふとすぐに消えてゆきます。お使の歸りなごに、かうした山徑

を通ると、それは寂しいものです。ほごりころころ。よく落ちたものです。椎の實か、何か。

ねんねがお守は何處へ往く。

あの山越えて里へ往く。

椎の山通れば椎がばらりばらりよ。

栗の山通れば栗がばらりばらりよ。

かち栗ひとつ拾うて、

かち栗かんと噛みわつた。

片つらは蟲くらひ。

蟲くらひは誰さんに。

よい方は何さんに。

それ持つてねんねこよ。

ねんねこ、ねんねこ、ねんねこよ。

これは「ねんねのお守」の一つですが、山の中のお守ですから、木の實ばかりを袂たもとに拾ひろつて、遊あそび遊あそび背中せなかの子こをあやしてゐます。誰たれさんにこいふ時はよその子の名なを指さして、何なにさんにこいふところは寝ねかしのつける子の名なを云いふのです。小さな赤あかん坊ぼうが小こさな榎えの實みを小こさな掌てにぎつて、そのまますすうと眠ね入いつて了しまふのもかはいいでせうね。白しろい小こさな晝ひるのお月つきさまも、何處どこかの低ひい小山やまのうへでねんねしておいでせうね。さうした時は。

盤城ばんじょうの「ねんね根山ねさん」も、いかにも山家やまがらしいものです。

ねんね根山ねさんの柴栗しばぐりこ。

笑わらんで、こぼれて、拾ひろろはれて、

お茶屋ちややの鍋なべこでうでられて、

賣うられて、買かはれて、食たべられて、

その皮かわこうて、食たべられた。

「その皮かわこうて。」は、その皮かわこつてでせう。あちらでは物の名なの下したにこをつけます。栗くりこ、鍋なべこ、こいふやうに。それが、ここに、この謠うたではかはゆくきこえるでせう。

おや。お猿さるが啼ないてゐますね。



## 笛の中の天童

「山の中には何がある。」といふ子守唄を知つてゐますか。

山の中には何がある。

山の中には御宮がある。

太鼓の中には何がある。

太鼓の中には笛がある。

三つにならない嬢さんと、

四つにならない坊さんと、

お乳が無いと泣かしやんし。

ねんねこ、ねんねこ、ねんねこよ、

山の中のお宮の中の、お宮の中の太鼓の中の、太鼓の中の笛の中に、それはか  
 はい清らかな嬢さんと坊つちやんが住んでゐるのです。さしづめ西洋の童話の  
 中にでも出て来さうな小人の王子と王女ですね。いいえ。日本のことですから、  
 ごちらも天童のやうな姿をした子たちでせうね。天童といふのを御存じですか。

天童は佛さまのお稚児さんです。私は小さい時、ある大きなお寺の法會に、その  
 天童にあがつたところがありました。姉さんもいつしよでした。私は水干に小さな  
 黒い冠をかぶつて、和尚さまに手を曳かれて、お堂の中を廻り廻り、紅や白や青  
 い紙の蓮華をちらすのでした。私はあまり小さかつたので、お乳がほしくなつて

泣き出したことをおぼえてゐます。姉さんはそれは綺麗でした。金ヒカのしやらしやら鳴る冠を振分髪の上に乗せて、緋や紅の装束をして、さうして矢張り、紅や白や青い紙の蓮華を撒いてまはりました。これはお宮ですから巫女のやうな嬢さんご。舞童のやうなすがすがしい坊つちやんかわかりません。ちやうどそのやうな子が、それも小粒の眞珠くらゐの子が二人並んで、あの笛の中に坐つてゐるのです。さうして、二人が二つの露の玉のやうに、今にも消えさうにして、びいひよろびい、びいひよろびいびいと泣いてゐるのです。これは出雲の國のねんねん唄です。



## 胡桃の子ども

英吉利の「お母さん鷺鳥」(マザー・グウス)の中に、胡桃の童謡があります。日本の笛の中の稚子さんごよく似てゐるでせう。

小さな緑のお家がひとつ。

小さな緑のお家の中に、

小さな金茶のお家がひとつ。

小さな金茶のお家の中に、

小さな黄色いお家がひとつ。  
 小さな黄色いお家の中に、  
 小さな白いお家がひとつ。  
 小さな白いお家の中に、  
 小さな心がただひとつ。

胡桃を割れば割るほど、いくつもいくつも色色のお家が出て来るのです。さうしておしまひに小さな核が小人のやうにポツチリ一つ笑つてゐるのです。よく澄んだ静かな瞳をあけて。あれが胡桃の子供です。



天神さまとお釈迦さま

あなた方も、柿や青梅の核を噛みわつたことがおありでせう。

梅干噛むとも核噛むな。

中に天神寝てござる。(東京)

あの天神さまが梅の木の芽なのです。その小さな緑の芽が、あの大きな一本の梅の木に成長するかと思ふと愉快ですね。

噛みいいのは柿の核でせう。一寸核の角のころを噛むと、あれはきれいに二つに割れます。柿の芽はいちばん立派でいい縁をしてゐますね。頭を内側に曲げて。

蓮の實のはお釋迦さま云ひます。ちやうど花祭のお釋迦さまが、甘茶のお湯をかかつて立つていらつしやるやうでせう。あの蓮の實の中のお釋迦さまが、蓮になつて、夏になると、涼しい白い蓮華や薄紅い蓮華のはなを咲かすのです。あの蓮華のはなの、夜明の露にぼうつぼうつと蕾から開いてゆく匂は、何とも云へませんね。



### 開いた開いた

蓮華の蕾は、尖がここにあかくて、中ふくらみになつてゐませう。一莖に一つづつ蕾んで。ごうかすると、露に濡れて、紅いろの頭をした白い小さな水鳥でも留つてゐるやうに見えます。それはすすしい清らかな感じがします。

蓮華の花の開くときは、ほんたうに、ほうつと音がするさうです。蓮華は昔から天竺で名高い花で、極樂の花のやうに云はれてゐますが、南米あたりでは直径一尺五六寸ほどの大きな花があるさうです。日本でもお寺の池や、お城の外濠などにはよく蓮を植ゑたものです。東京では、あの郊外の葛飾あたりへゆくと、蓮

の田が、青い稲田や唐黍畑のうしろなどに、ぶんぶんご勻つてゐます。蓮の花の咲くのは雁が来るにはまだ早い季節ですが、朝早く起きて、藁草履などつつかいて見に出る爽かさは何とも云へません。

あの薄あかい蓮の花が、一本・二本・三本・四本・五本・六本・七本・八本・九本・十本と蒼んで、みんな、それが子供で、生きてゐて、目をあけて、いい勻をさして、露を含んで、すすしい幼ない呼吸をして、さうして圓く輪になつて、手をつないで、開らいた開らいたと歌ふ世界があつたとしたら、それこそほんたうに子供の極樂でせうね。

そんな世界は無いと云ふのですか。ありますとも。みんなあなたの方の目の前に、あなた方自身で、いつでも蓮華の子供になつてゐるではありませんか。

開いた。開らいた。

何の花開いた。

蓮華の花開らいた。

開いたと思つたら、

やつとこさこさ蒼んだ。

蒼んだ。蒼んだ。

蒼んだと思つたら、

やつとこさこさ、開らいた。(東京)





## かうもり

今度はかうもりのお話をいたしませう。

かうもりは、皆さん、よく御承知でせう。あの蝙蝠は、よく夏の夕方になると、河岸端の柳のかげや、三日月さまの明り出した薄ぐらい軒竝の空を飛んでゐます。さうして晩には、白い雲がうつすりこかかつてゐたり、雨でもふりさうな、むしむしした暑い夕風の季節がつづいたりします。

私たちの子供のときも、夕飯がすむと、いつも外へ出ては、かうもりを呼んだり、追つかけたりしたものでした。私の家は酒屋でしたので、お倉のあたりによ

く蝙蝠が飛んでゐました。それに蝙蝠はお酒が好きです。それでよく捕へては、お皿に酒を注いで、その中に翼を引つ張つてはうつ向けに突つ込み突つ込み、酒を飲ましたものです。すると蝙蝠が赤くなつて酔つはらつたり、鼠のやうにチウチウ鳴いたりしました。

かうもり来い。酒のましよう。

酒がないか。樽ふらしよう。(出雲)

酒屋のかうもり。酒のましよう。

焼酎のむかい。酒のむかい。

もちつと下ればまたのましよう。(日向)

何處でも、さうだご見えます。

かうもり。かうもり。

下い落ちて、糟食つて、

また天上へあがれ。(越後)

酒がすきですから、酒の糟もすきなのでせう。

かうもり。かうもり。

山椒くりよ。

柳の下で水のましよ。

かうもり。かうもり。

山椒の子。

柳の下で酢のましよ。

東京ではかう申しますね。山椒も好きださうです。  
それから、綿やろとも云ひます。

かうもり來い。

綿やろ。(丹後)

かはほり來い來い。

屋根の上で綿食はそ。(伊勢)

かうもりこい。お茶もつて来い。

お茶がなけらにや。

湯を持つてこい。(名古屋)

かうもりこたろ。

海へ出て、水のんであがれ。(越後)

こ、いふやうなものもあります。

蝙蝠のうたは、蝨のこよく似たのものもあります。

かうもり来い。

乳のましよう。

あつちの乳はにがいぞ。

こつちの乳は甘いぞ。(丹波)

かうもり来い。

行燈にかくれて笠きて来い。(大阪)

こんなのですが、蝙蝠の飛んでゐる空へ、草履を投げてうたふ時には、

かうもり来い。

草履やろ。(安藝)

かうもり来い。

早くこい。

わらじやるから早くこい。(長野)

かうもり来い。

草履やろ。

草履がなけりや、

買うてやろ。(阿波)

なぞこ、うたひます。草履のかはりに、あなた方は何を投げますか。小さなお靴ですか。

それからまた、あのかうもりは、鳥のお仲間にも獣の群にも入れないで、いつでも両方からいぢめられるお話がありますね。で、

かうもり来う。かうもり来う。

我が身をかくすな。

田圃のねずみのばけたがや。(加賀)

こんな悪口も云はれます。

かうもり来い。

鳥の人数にしてやらう。

してやらう。(備後)

こんなにもばかにされたりします。  
滑稽なものには、こんなのがあります。

かうもり。かうもり。

よんべ、猿が子を産んだ。

見舞にこんか。かうもり。かうもり。(豊後)

かうもりの童謡は、これくらゐです。あなた方も、もつこ面白いのを作つて  
ごらんなさい。さうして、かうもりを、お月夜の晩に、追つかけてごらんなさ  
い。

私は小笠原の父島(東京から六百海哩も南の方にある群島の一つです。)にゐた

一と夏のことを思ひ出します。ちやうど黄色い椰子の花の盛りでしたが、十五夜  
さまの晩なごには、兩方の羽をひろげると、さしわたし一尺五六寸もあらうと思  
ふほどの大きな蝙蝠が、大きな紅い満月の前をはたはたと飛んでゆくのが見えま  
した。蝙蝠の大きなのは野ぶすまご云つて、人の顔を塞いで息の根を留めたり、  
血を吸つたりするのだときました。



酸漿

酸漿は皆さんがよく御存じです。秋になつて囊が下を向いてさがります。それを附根からもいで、その囊の皮をむけば、赤い坊主が出ます。すると、その皮が衣をきたやうになります。それをそうつと、くるくる廻してあるうちに、中からシンが出て、たねが出て來ます。いちごきに出ると破れてしまふので、そうつとそうつとやらねばなりません。「根は先へでエろ。たねはあとからでエろ。」です。

根は先い出エろ。

種はあとから出エろ。

坊さん。坊さん。赤い衣きせて、

観音様へ連れてつてやるから、

早く、廻り燈籠になアレ。(東京)

ほんこに赤い衣きた坊さんみたいです。

酸漿。ねえづき。破れんな。

破れた方へ灸すよ。(紀伊)

破れたらたいへんだから、お灸をするるぞと脅かすのです。酸漿だつて、おんなじ子供ですからお灸をするられたら熱いでせう。

この酸漿の詣はたいしてありません。面白いのはこれくらゐです。で、皆さんも一つ作つて御覽なさい。もつといいのがたくさんできるでせう。

立秋の頃はよくお祭があります。お祭の晩などには酸漿をよく賣つてゐます。私にはあのお祭の頃が思ひ出されてなりません。つくつくほうしもよく鳴きます。大きな黄色いお月さまも上ります。玉蜀黍を焼くにはひもします。栗もまだ青い穂のまま風で揺られてゐます。夜宮の燈がチラチラして、お囃子や覗き眼鏡の文句もきこえます。

かうして、夏から秋にかけて葡萄が實り、山からお里へ、栗鼠がちよろちよろ遊びに下りて來ます。酸漿を鳴らし鳴らし、かはいいい女の子たちも観音様や閻魔様の祭に出かけます。



蜻 蛉

こんぼオ。こんぼオ。

俺ちやちやの乳のいぼごまれ。

ごまれ。(越後)

蜻蛉も赤ちやんでお乳をのむのだと、みんなの子供たちは思つてゐます。自分たちが赤ちやんで、いつもおつ母さんのお乳にかぶりついてゐるものですから、蜻蛉にもものましてやらうと思ふのでせうね。「俺ちやちや」とは「俺のお母さん」

云ふことです。

さんぶ。さんぶ。

酒屋の粕食つてちよいとこまれ。(上總)

さんぽ。こオまれ。

お寺のお背戸で蠅を取つて食はそ。(紀伊)

さんぽさんぽ。おこまり。

あしたの市に飴買うてねぶらしよ。(土佐)

さんぽ。さんぽ。おこまり。

あしたの市に鹽辛買うてねぶらしよ。(土佐)

お乳や飴はまだいいのですが、酒の粕だの、蠅だの、鹽辛だの、蜻蛉は妙なもののばかり好きだと思えますね、蝿にくらべると姿や形が下品ですから、子供たちもいくらか輕蔑してゐるのでせう。

それにうかご乗つて、こまるこすぐに鵜竿でやられるのです。

高法度。低通れ。

そつちへ行くに閻魔があるぞ。

こつちへ來るとゆるしてやるぞ。(東京)

蜻蛉が空を高く飛んで來ると、鵜竿がごごかないものだから、高う飛ぶのは御



法度だご云ふのです。それから、そつちへ行かれては困るものだから、閻魔がゐるぞと脅かすのです。赤い口を開けた閻魔さまは自分たちも恐いものだから、蜻蛉も恐いだらうと思つてゐるのです。東京では、「ぎんや、まつご低山通れ。」とも云ひます。ぎんごかしやりごか、あけずだごか、色色名まへがあります。大きなのがやんまです。

こんぼころろ。

いしの家が焼けたら、

そこいらごまれ。(常陸)

いしごはぬしです、で、いしの家はお前の家といふことです。外は暑い、蓼や葉鶏頭が火事のやうです。そこいらのすすしい日かげの草つ葉にごまれごまれご

云ふのです。

蜻蛉のなかでも、ここに翅のうすい小さな精靈こんぼは、ちやうご孟蘭盆の頃に出ます。さうして水に近い路の葉や、流のうへをすいすいと飛んでゐます。すすしいが秋らしいあはれさを見せて、かすかな光をして消えてゆくものです。それを私の國では、

しようろくりくり。

なんまいだ。

又ん盆に來なんせ。

ごうたひます。

黄色ご銀の段だらの、あの麥葉こんぼや、唐辛子のやうに赤いしほからこんぼ

は、あなた方もよく御存じでせう。

さんぼやさんぼ。

麥わらさんぼ。

しほからさんぼ。

もち竿もつて、

おまへはささぬ。

日なたはあつい。

こち来てこまれ。

日蔭でやすめ。(丹後)

ほんごにかはいがつて下さい。大きな目玉の蜻蛉の近目さんを。



## 砂山

六月(大正十一年)の半ば頃に、私は越後の新潟に行つてまわりました。私が行くとき、新潟の子供たちは非常に喜んで、私のために童謡音楽會を開いてくれました。

童謡はみんな私のものばかりをうたふといふので、私もこんなに喜んだか知れません。

その日は午後の三時前から、師範学校の講堂に二千人あまりの、各小學校の生徒たちが、ギツシリつまつて、そして、みんな私を待ち受けておりました。私が行

つて半開きのドアの外から覗くと、もうみんなが大さわぎして、こつちを伸び上つて見ておりました。みんなが眼をクリクリさして、顔を眞赤にしたり、笑つたりしてゐるのでした。私も眞赤になつてしまひました。

いよいよ始まつて、私が席につくと、それこそまた大さわぎでした。私は、そんなに見ちやいけない見ちやいけないと、顔に手をあてました。大人の先生たちはそれを見て、クスクス笑つてゐます。子供たちはヒヨンヒヨン飛び上つたり伸び上つたりしました。

私がいよいよ講壇に上ると、ワツワツと騒いで、手を拍きます。私も嬉しくなつて、ふるへ聲で「ほうほう螢」を歌ひました。それから、「金魚の鉢に」といふのを手眞似でやつて、今度はまた、「兎の電報」をやつたのでした。

えつさつさ。えつさつさ。

びよんびよこ兎が、えつさつさ。

郵便配達、えつさつさ。

と、両手をふりふり、講壇の上をかけまはると、ポケットに入れてた仁丹の罐が、いつしよにカランカラン鳴るので、ほんごに面白かつたさうです。しかし私は一生懸命ですからね。みんなは面白がつて、手を拍いたり笑つたり、すつかりいいお友だちになつてしまひました。

それから、子供たちが入れ代り立ち代り、私の童謡を十ばかり歌つてくれましたが、みんないい出来でした。その童謡の中には、「蕨」や「雨がふります。雨がふる。」もありました。いい聲で無邪氣に歌つてくれました。こんなに私が喜んだか、さうしてこんなに子供たちも満足したか。

九月ごろまたやつて來ますから、また童謡音楽會をやつてほしいと私が頼む

と、また喜んでくれました。それでは何か、新潟の童謡を一つ作つてほしい、それを今度は歌ひたいといふのでした。それは嬉しい。そんなら一つ作つて、それを置土産にしようよ、私も約束しました。

その夕方、會が濟んでから、學校の先生たちと濱の方へ出て見ました。それはさすがに北國の濱だと思はれました。全く小田原あたりとは違つてゐます。驚いたのは砂山の茶藨藪で、見渡す限り茶藨の原つはでした。そこに雀が澤山啼いたり飛んだりしてゐました。その砂山の下は砂濱で、その砂濱には、藁屋根で壁も蓆張りの、ちやうど私の木兎の家のやうなお茶屋が四つ五つ、ほつんほつんと竝んで、風に吹きさらしになつてゐました。その前は荒海で、向うに佐渡が島が見え、灰色の雲が低く垂れて、今にも雨が降り出しさうになつて、さうして日が暮れかけてゐました。砂濱には子供たちが砂を掘つたり、鬼ごっこをしたりして遊んでゐました。日がとつぷりと暮れてから、私たちは歸りかけましたが、暗い砂

山の窪みにはまだ、一三人の子供たちが残つて、赤い火を焚いてゐました。それは淋しいものでした。

海は荒海。

向うは佐渡よ、

すずめ啼け啼け。もう日はくれた。

みんな呼べ呼べ。お星さま出たぞ。

暮れりや、砂山、

汐鳴りばかり、

すずめちりぢり。また風荒れる。

みんなちりぢり。もう誰も見えぬ。

かへろかへろよ、

茶萸原わけて。

すずめ。さよなら。さよなら。あした。

うみよ。さよなら。さよなら。あした。

私は小田原に歸つてから、かねての約束を果たすために、さうした新潟の童謡を作つて、あの日の子供たちに送りました。それがこの「砂山」です。中山晋平さんが作曲してくださいました。

新潟の子供たちは、非常に喜んで歌つてくれるさうです。私もあの子供たちの氣持がよくわかつてゐるつもりです。

金茶色の實が熟れる時節も、もうあの茶萸原にやつてまゐりませう。子供たち

も私の童謡を自分のものとして、あの砂山の茶萸を摘み摘み歌つてくれるでせう。それを思ふと、私もあの雀のやうに飛んで行きたくなります。



お月さまいくつ

お月さまいくつ。  
十三七つ。  
まだ年や若いな。  
あの子を産んで、  
この子を産んで、  
だアれに抱かしよ。  
お萬に抱かしよ。

お萬は何處へ往た。  
油買ひに茶買ひに。  
油屋の縁で、  
氷が張つて、  
油一升こぼした。  
その油ごうした。  
太郎ごんの犬ご、  
次郎ごんの犬ご、  
みんな嘗めてしまつた。  
その犬ごうした。  
太鼓に張つて、  
あつちの方でもごんごんごん。

こつちの方でもごんごんごん。(東京)

この「お月さまいくつ」の謠は、みなさんがよく御存じです。私たちも子供の時は、よく紅い圓いお月様を拜みに出ては、いつも手拍子をうつては歌つたものでした。この童謠は國國で色色と歌ひくづされてゐます。然し、みんなあの紅い圓いつやつやしたお月様を、若い綺麗な小母さまだと思つてゐます。まつたくさう思へますものね。

お月さんほつち。

あなたはいくつ。

十三七つ。

そりやまだ若いに。

紅鐵漿つけて、

お嫁入りしなされ。(伊勢)

ののさまごつち。

いばらのかげで、

ねんねを抱いて、

花つんでござれ。(越後)

あこさんいくつ。

十三一十。

まだ年若いの。

今度京へ上つて、

藁の袴織つて着しよ。(紀伊)

お月さんいくつ。

十三七つ。

まだ年は若い。

七折着せて、

おんごきよへのぼしよ。

おんごきよの道で、

尾のない鳥と、

尾のある鳥と、

けいつちいや、あら、

きいようようご鳴いたごさ。(伊勢)

「おんごきよへ」とは、「今度京へ」といふのがなまつたのです。

お月さまいくつ。

十三七つ。

そりやちと若いに。

お御堂の水を、

ごうごご汲もに。(美濃)

お月さま。お年はいくつ。

十三七つ。

お若いことや。



お馬に乗つて、

ジャンコジャンコおいで。(尾張)

かういふ風に、「そりやまだ若いに。」と、みんな歌つてゐるから面白いのです。京へ上つたり、紅かねついたり、お嫁入りしたり、赤ん坊を生んだりしてゐます。お馬のジャンコジャンコもおもしろいでせう。それにまた、「そりやまだ若い。若船に乗つて、唐まで渡れ。」(紀伊)といふのもあります。それから少し變つてゐるのに、一寸西洋の童謡見たやうなのがあります。それは珍らしいものです。

お月様いくつ。

十三七つ。

まだ年は若い。

お月様の後へ、

小いちやつけ和尚が、

滑橋をかけて、

お月様拜むこて、

ずるずるすべつた。(下 總)

これは、空のけしきが其まに歌はれてゐます。小さい和尚さんは白い星か薄霧のやうな星の雲かでせう。滑橋もさうした雲のながれでせう。天の川のやうな。ずるずる滑るところがをかしいではありませんか。

それから、その綺麗な若いお月様の小母さまに、みんながお飯を見せびらかしたり、またいろんなものをせびつたりします。やはり子供の小母さまですから。

お月様。

観音堂下りて、

飯上がれ。

飯はいやいや。

あんもなら三つくりよ。(信濃)

お月様。お月様。

赤い飯いやいや。

白い飯いやいや。

錢形金形ついた

お守りくんさんしよ。(岩代)

あごさん。なんまいだ。

ぜぜ一文おくれ。

油買って進じよ。(肥前)

ごうでやさん。ごうでやさん。

赤い衣服下んせ。

白い衣服下んせ。(陸中)

そのお月様は、紅いのに桃色だと云つたとして、プリプリ怒つたのもあります。

お月様桃色。

誰が云つた。

海女が云うた。

海女の口ひきさけ。(尾張)

それから、

大事なお月さま、

雲めがかくす。

とても隠すなら、

金屏風でかくせ。(東京)

といふのがありませう。ほんごに金屏風でなくては、あの若い小母さまには似合はないでせうね。いかにも昔のお江戸の子供が謠つたやうでせう。氣象が大き

くておほまかで、張があつて、派出で。

「兎うさぎ」といふのも御存じでせうね。

兎。うさぎ。

何見て跳ねる。

十五夜お月さま

見て跳ねる。ヒヨン〜。

ほんごに、お月夜の兎のよろこび云つたらありません。兩耳を立てて、草の香の深い中から、ヒヨン〜と跳ねて飛んで出る、あの白い綿のやうな兎さんもおかしいものです。それにしても、あのまアるいお月さまの中には、いつも兎が杵をもつて餅を搗いてゐる筈でしたね。



## みやらび

みやらびは琉球の言葉で少女のこころを云ひます。その琉球の歌に、

つきのかいしや、

こか、みうか。

みやらび、かいしや、

どうななつ。

ほういちようか。

といふのがあります。

これは月の美しいのは十三日、少女の美しいのは十七歳といふことです。あのお月さまいくつ十三七つといふのも、かういふところに何かよりどころがあるかも知れません。